

---

**ハロワに行ったはずなのに、なりゆきで『変換師』になっちゃった。**

工場長

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハロワに行ったはずなのに、なりゆきで『変換師』になっちゃった。

### 【Nコード】

N9618X

### 【作者名】

工場長

### 【あらすじ】

自然物を色々操れたらいいな、そんな思いを込めて、この物語をお送りします。

『物質変換師』として、これから色んな事件に巻き込まれるの主人公、浜坂 カエデ、24歳の女の子  
ファンタジーの世界に飛ばされ、変換師となり、『リステルIIカベルネ』と、名乗ることに。

そんな彼女が、異次元の扉を探し出し、日本に無事、還るまでの

お話です。

基本、コメディティストでお送りします、よろしくお願いします  
ちなみに、元になったのは、ワタクシが眠っている時に見た夢で  
す。

## 【第1話・変換師になってみようか】

「お待たせしました、これが貴方の身分証明書です。ちゃんと肌身離さず持つていてくださいね。」

事務員の男性に、出来立てホヤホヤの免許を渡された。

これで晴れて、私の念願だった、『物質変換師』への仲間入りを果たすこととなったのだ。

### - 物質変換師 -

それは、地上にある、ありとあらゆるものを、意のままに操ることの出来る職業。

平たく言うと、精霊使いみたいなものだ。

人はみな、生まれ持って、何かの属性に所属している。私の知っている限りでは、『火』『水』『土』『樹木』『雷』、そして、ちよつと特殊だけど『金属』、このくらいだろうか。

自分で、『この属性がいい』という自由は効かないのが玉にキズだけ。

そしてまだ、この他にも未知の属性がある……らしいのだけど、その辺はまだ、解明されてないみたい。

そもそも、この『物質変換師』というものが、職業として定着したのは、ほんの5年前だという、それまでは、『超能力』として、扱われていた部類のもの。この職業が出来るまでは、ふとしたきっかけで、能力を持ってしまった人達は、その力を隠し、皆と何も変わらない一般人として、振舞っていたのだ。

しかし、学者たちの、研究の進歩により、本来、備わっている属性の力を、人工的に増幅させることに成功した。

とはいえ、誰もがなることが出来るわけではなく、その、増幅力

テゴリに適合した人のみが、こうやって、私みたいに、『物質変換師』として、認定されるのだ……。

「……さん、お姉さん！」

思いにふける私の思いを遮るように、さっきの事務員の男性が私を呼んでいた。不意打ちともいえる、呼びかけに咄嗟とつさに反応できずに

「ふっ……ふあい？」

まの抜けた返事を返すと、男性は、少し呆れた顔をしながら、一枚の紙キレを差し出しつつ、私に言った。

「すみませんが、物質変換師として、名乗る名前を登録してもらえませんか？後ろがつかえてますんで。」

そうだった、物質変換師として、活動する時には、本名は使えない、何故だかわからないけど、何でも大人の事情だそうだ。

そういえば、私が通っていた訓練校の先生にもクギを刺されていたんだっけ

『アナタ、ちゃんと変換師として名乗る名前を考えておきなさいよ、おざなりにつけたら後で後悔することになるからね』

「あ……えーと……。」

そう言いかけたところで

「一応、言っておきますが、変にウケを狙った名前や、卑猥な表

現を含む名前、例えば『ち×ぽこ』とかですね、それと、『あああ  
あ』とか、おざなりな名前は、控えて下さい、間違いなく、後悔す  
ることになりますよ。』

彼には、私のことが、よほど変な人間に見えているのか、いたっ  
て事務的な口調で、いらぬ心配をしてきた。

私だって、変換師になったことで、ちょっとは有頂天になってい  
たものの、そんな常識知らずではない。

そんな彼の態度に、少し苛立ちを覚えつつ、差し出された紙に、  
これから私が名乗る名前を描いた

『リステルⅡカベルネ』

「うーん、やっと終わったわ。」

役所を一步出たところで、大きく伸びをした。

かれこれ半日以上かった、手続きもやっと終わった、とはいえ、  
これで終わりではない。

晴れて、変換師になったとはいえ、仕事を見つけないことには、  
ただの自宅警備員、無職と何ら変わりはないのだ。

「まずは・・・変換師の集まるギルドに行かないとね。」

そう呟き、街道を走る馬車を止め、荷台に飛び乗ると、ゆっくり  
と動き始めた。

屋根もついてない、粗末な荷台、そこに人が乗れるように、椅子

がついていた、そこに座りながら、流れゆく風景を眺める。

土が剥き出しになった、街道。そして、両側には草原しかない地形。流れゆく景色を、風に吹かれつつ見ながら、ふと、あることを思い出し、つい、そのことが、言葉になった。

「あー、お父さんやお母さん、探してたりとかするんだろっなあ」

私が、ここに来て、定かではないけど、三ヶ月くらい、時が経っていることになるのだろう。

その日、私は、職を探して、家から一番近い、ハローワークに行つて、PCで求職情報をプリントアウトして、順番を待っていた。

その時、急にトイレに行きたくなり、少し慌てつつ、扉を開けたまでは、覚えていた。

すると、みるみるうちに、空間がグニヤリと歪み、気を失うように、一瞬、目の前が暗転したその次には、見慣れない荒野に一人、立っていたのだ。

手に持っていたのは、求職情報が載った紙と、携帯電話。そして、ズボンのポケットにはお財布。

トイレに行くのに、邪魔になるからと、貴重品を抜いたカバンはベンチに置いて来た。

「はー……いつまでこの世界に留まんなきゃいけないんだろ」

そう、ため息をつきつつ、ディスプレイに『圏外』と表示された携帯電話を見つめた。

メールも通話も出来ない、ただのプラスチックとなった携帯電話だ。

「もう、カメラ機能しか役に立たないわね。」

ここに来て、長いこと充電していないのに、不思議と電池の切れない携帯、そのカメラで風景をパシャッと撮った。

「おー、カエデ！遅かったな、やっぱり役所で手間取ったか。」

馬車から降りて、ギルドに着くや否や、浅黒く、背の大きな女性が駆け寄ってきた

「先生。」

そう、この世界に来たとき、彼女の姿を見て、パニックになっている私をなだめ、彼女には、到底信じることの出来ないだろう、私の話を信じてくれ、親・・・というか、お姉さん代わりになつてくれた人である。

私がパニックになつた理由、それは、彼女の風体にあつた。

ネコと人間の合の子みたいで、そんな感じ、耳は少し尖っていて、瞳は緑色にキラキラと光っていた。

しかも、ほぼ半裸で、服を着ているように、体毛が、体半分を覆うように、生えていた。

更に、尻のあたりから、長い尻尾が生えていた、異形の者とも言える風体だけど、この世界では結構居るらしく、『亜人』という種族なのだそうだ。

「アタシくらいでパニックになってたら、街に行ったら気絶するぞ。」

怒るでも拗ねるでもなく、優しく私に言ったそんな先生の言葉で、正気を取り戻し、彼女についていくことにしたのだ。

その後、色々話をした結果、当分、こ世界で生きることになるだろう私に、『物質変換師』としての道を、勧めてくれたのも彼女なのだ。

ちなみに、『カエデ』というのは、私の本当の名前である。

「それで？うまくいったか？さすがの私も、異世界の人間のアンタがすんなり通ることが出来るか心配でさ、まあ、その顔を見れば大丈夫だつてところだな？それと、名前、ちゃんと決まったか？」

相当私のことが心配だったのか、息巻くように喋る先生に

「大丈夫でした、それと・・・私の名前は『リステル』カベルネにしました。」

「ほおう、『リステル』か、いい名だ。それで？由来とかあるのか？」

「本当は、色々考えていたんですけど、どうせだからはっちゃけた名前にしようかって、由来は、ワイン・・・いや、葡萄酒って言ったほうがいいんですか？そこから取りました。」

「そうか、アンタが気に入っているのなら、それがいい。」

そう、私に笑顔を見せ、更に続けた

「でだ、早速初仕事、してみるか？」

「ええ。」

連れ立って中に入ると、カテゴリごとに掲示板が別れており、依頼内容うが書かれた髪が、鉾で止められていた。まるで、ハロワの掲示板のように。

私は迷わず、『樹木』の掲示板に足を向けた、その後についてくる先生。

それをボーッと眺める、色々あるんだ「××の討伐を樹木の力で加勢を願う！」とか「断崖絶壁に橋をかけるお仕事です！」とかとか。

「はぁ……。」

思わずため息をついていると。

「これがいんじゃないか、アンタにぴったりだ！」

先生の声に振り向く、すると、掲示板の一つを指さしていた。そこには……

『庭の芝生の再生を出来る方、急募！』

「……草、ですか？」

「そう。」

そう一言言つと、私をみて笑顔を向けた。

## 【第2話・旅立ってみようか】

「いっくよー！サブスタンスチェンジ！」

ここは、私が、依頼を受けた街の隣にある街、その中心街から、やや少し離れた一軒家の庭。

依頼にあったとおり、芝生が枯れ、地面がところどころ、むき出しになって、見栄えが悪くなっている、依頼主の家の庭に入ると、早速、地面に手を置いて、物質変換発動の呪文的なものを唱えた。その私の言葉に呼応するように、芝が元氣を取り戻し、みるみるうちに、庭が、緑の絨毯を隅々まで敷いたように、綺麗になった。

「ふう……。」

その光景に、安堵のため息をついたとき

「よっ！ちゃんとこなせたじゃん、これでアンタも『変換師』として本格的に、仕事を受けることが出来るな。」

初仕事で不安だろうと、一緒に付いてきてくれた先生が、私の肩を叩いた。振り向くと、猫と人間の合の子、この世界では、『亜人』と呼ばれる種族の彼女が、私に笑顔を見せている。

「あ……。ありがとうございます。」

これで、依頼は完遂、持ってきた書類にサインだけ貰い、ギルドに戻る、後は、書類と引き換えに、報奨金を貰い、これで本当に、一区切りがつく、そういうシステムなのだ。でもこれってぶっちゃけ

『日雇い労働者』じゃない？

しかも、元居た世界で言う、『派遣労働』である、既に、私の手元に報酬が来る前に、ギルドから上前をピンはねされているのよねえ……。

やっぱりどこの世界も胴元が儲かる仕組みなのか。いやいやいや、ここは『ふぁんたじい』の世界だ。

私は、その手のものには、詳しくないけど、魔法という立場が『物質変換』という名前になっただけで、平たく言うと、魔法が日常的に使われ、亜人が行き交い、そのうち、人間の言葉を操る、空飛ぶ妖精さんなんかも絶対に出てくる。

こんな夢のような世界で、上前だのピンはねだの、下世話なことを考えたら負けなのだ。

しかし、なんだろう、この、すっきりしない感は、あー……、うー……。

「ちよつとリステル、何一人で頭抱えてんのよ。」

不意に先生の声がした。

「あ、えーっと……何でもないです。」

「そうか？ならいいのだがな。じゃあとつととギルドに戻って……」

と、その時、遠くの方から

【ズドン！】

爆発音、それと同時に土煙が空を覆っていた。

その音と、煙は方角からして、街の中心辺りだろう、目をやると、さっきまで見えていた時計塔が、跡形もなく無くなったのだろうか、私の視界から消えていた。

音と、煙から、推測するに、かなり大きな爆発だったのだろう。しばらく様子を見ていると、視界に小さく、大勢の人が慌てた様子で行き交い、悲鳴と怒号が聞こえてきた。

これは、ただ事ではない、そう思い、不意に足向けようとした、その時。

「行くな！リステルっ！」

先生の怒鳴り声がした。

「え・・・？でも・・・。」

それに戸惑う私を見つめた後、爆発が起こった方を眺めながら

「今のアンタが行ってもどうしようもないんだよ、足でまといになるだけだ。この街にも、手練の『変換師』が居るだろう、彼らに任せな。」

「もしかして、この爆発って・・・。戦争が何かなんですか？」

どこの世界にも、人の集まるところには、戦争というものがある。宗教や政治、思想の違いから、人々が日夜、争い、傷つけあってい

るのは、どこも一緒なのだろうか。

「とりあえず、ここで長話は無用、巻き込まれたらたまらないかな、よそ者のアタシ達は引き上げよう。詳しい話は帰ってからだ。」

そういう先生は、難しい顔をしていた。

私はちよつと引つかかるものがあつたが、先生の醸し出す雰囲気です、何も言えなくなり、この街を後にした。

「それで？お嬢さん、初仕事はどうだったい？」

あれから数時間、私は先生と二人、変換直営の酒場に、食事を摂りに来ていた。

声の主は、ここに来て数箇月、すでに顔見知りになった、スキンヘッドで、筋肉質、ちよつと顔の怖いマスター。

背中の中の棚には、酒の詰まった瓶が、所狭しと並べられている。

後ろを向くと、木で出来た、丸テーブル、そこに、服を着たワニ男や、ゴーレムっぽい人、色んな人種の変換師が、酒を飲みながら、会話を交わしていた。

初めて来た時は、ファンタジー小説に出てくる『まんま』の店の雰囲気、物珍しかったが、今となつては、日常の風景。

「大成功よ、まあ・・・依頼内容が『庭いじり』だったから、報酬は少なかつたけどね。」

「ハッハッハ！そんなもんだ、駆け出しなんだからしょうがないさ、なあ先生よお！」

高笑いをしながら、先生に話しかける、すると彼女も笑いながら

「そうだな、そのうち難しい依頼もこなせるようになるさ。と、ところで、リステル、アンタに言っておきたいことがある。」

「何ですか？」

「昼間のことと、関係があるのだがな、これからアレに巻き込まれそうになることがあると思う、でも何があっても、全力で逃げる、絶対に関わり合いになってはいけない。」

「はい……。先生がそこまで言うなら、でもそれならどうして私に変換師を勧めたんですか？」

「それはな、アンタが元の世界に還るためさ、ここ数箇月、この街で色々と試してみたが、還れなかったろ？この世界、アンタからするとこの異世界は、昼間見た通り、残念ながら、治安が落ち着いているとは言えないんだ。ここがダメとなると、他の街で情報を得る必要が出てくる。その間、どうしても喰って、寝て、生活しなきゃならない、一般人と、変換師だと、仕事の数も、期間も違う、パツと稼いで、次へ移動、ジプシーみたいな生活になるんだ。」

「はあ。」

「幸いなことに、アンタの属性である『樹木』は、戦闘にあまり向かない能力だからな、依頼の大半は、今日のような雑用みたいな

仕事が多い、地味だが、逆を言うと、危険に巻き込まれる可能性が少ないってことさ。」

「はい。」

「だから、なるべく危険を避けて、金を稼いで、情報を集め、元の世界に還る手段を見つけるんだ、何、大丈夫、きっとあるさ。」

「わかりました、って？でも何か先生の口ぶりが、これからは私一人で、みたいな感じですね、もしかして一緒に来てくれるとか、そういうことは・・・。」

「バカたれ、そうしたいのは山々だが、私にだって、ここで変換師の育成という仕事があるんだ。いつ帰れるかわからん旅に、付き合えるわけないだろ？生徒はアンタだけじゃないんだ、それに、今日の仕事っぷりで一人でも大丈夫だと確信したよ、リステル、アンタの潜在能力は、大したもんだ、まあ、『樹』を操る能力はからつきしだけど、『草』に関しては、一人前以上の能力だよ。自信を持って。」

最初の方は、深刻な顔をして話していたが、最後にそう言うと、先生は笑った。

そうか、最近、この亜人の先生との生活にも慣れてきて、ずっとこの異世界に居続けるんだろうな、そう肌で感じていたものの、やっぱり話を聞いているうちに、還らなければ、そう思い始めていた。

そして、それと同時に、今まで親として、姉として、慕ってきた先生とも別れなければならない、その寂しさもあった。

ここに来て数箇月、毎日のように、還る方法を探していたものの、この街でもう、還るために得る情報は無い。

なら、旅立つ他ないんだろうな。

「わかりました、先生と離れるのは、少し寂しいんですが、いつまでも甘えていたらいけませんよね。」

「そういうことさ、私だって寂しいんだ、ずっと一人で暮らしていたからな、短い間だったけど、妹みたいな存在が出来て嬉しかったよ。でもやっぱり、それじゃあいけないんだ、アタシは先生の仕事、アンタの仕事は一日も早く、『日本』というところに還ること、両親だって、いきなりアンタが居なくなつて、心配しているだろ？」

そうだ、元の世界ではどのくらい時間が流れているんだろう。

もしかして、搜索願とか出されて、大事おおごとになっているかもしれない。

一刻も早く、旅立つ必要があるんだろうな。

「じゃあ、今夜から出発の準備をして、明日には旅に出ます。このまま先生の所に居たら、決心が鈍りそうだから。」

「そうだな、アタシもアンタを手放したくなりそうだ、じゃあちよつと早いけど、餞別を渡しておこう、これで当分は食いつなげるはずだ。」

そう言いつつ、先生は金が詰まっているだろう皮の袋を私によこした。

「ありがとうございます。大事に使わせていただきますね。」

「当たり前だ、結構な額が入っているとはいえ、くれぐれも、無

駄遣いするんじゃないぞ。あ、それとも一つ、言い忘れたことがあった。」

「何ですか？」

「昼間の爆発の件さ、あれは一種のテロリスト集団と考えて貰っていいだろう、危険な思想を持った変換師の集団さ、どこにも過激なヤツは居る、気を付けな。立ち寄った街で、ヤツらの名前を耳にしたら、すぐに立ち去る事だ、絶対に関わり合いになるな。」

「そんなに危険なんですか？」

「そうだ、よっぽど自分たちの活動を誇示したいのか、必ず声明を出すんだ。それから、数日で破壊活動を始める。一応、警戒はしているようなんだがな、神出鬼没で、手をこまねいているのさ。この街みたいにな、小規模だと、宣伝効果が無いとみて、手を出さないんだけどな、大きな街になればなるほど、出会う確率は高くなる、どのみち、もともと戦闘には向かない『樹木』、中でも『草』の能力しか、ほとんど持っていないアンタじゃ太刀打ちどころの騒ぎじゃない、逃げるといえば、聞こえが悪いが、身を守るためには立派な手段だ、わかるな？」

「わかりました、それで？その集団の名前って何ですか？それを知らないことにはどうしようもないんですけど。」

私の問いかけに、一呼吸おいて『それもそうか・・・』そう呟きつつ言った。

「『PTA』だ。」

あれ？どこかで聞いたことのある名前だぞ？

つつく

### 【第3話・試行錯誤してみようか】

「それじゃあ先生、行つてきます。」

「ああ、気を付けてな、何もなくても、手紙ぐらいは書くんだぞ。たまには帰つて来いよ、そして……」

ひょんなことから、日本のハローワークから、異世界に迷い込んだ私は、本腰を入れて、還るための旅をすることにした。

見送りに来た、この世界で、今まで親……というより、お姉さん代わりになつてくれた、この村で変換師の卵を育成する、猫と人間の合の子、『亜人』と呼ばれる種族の先生が、名残惜しそうに、私を心配して、色々と言っている

「大丈夫ですって、顔を見せに、帰ります。だってもう、ここは私の故郷みたいなものですから。」

「そうか、アタシはずっとここに居るから、いつでも帰つて来い。そして最後に一言いいかな。」

「何ですか？」

ああ、絵に書いたような、感動的な別れ、そして旅立ちのシーンだなあ。それに、『最後に一言』だって、泣かないように気を付けないと。そう思った矢先。

「リステル、立てたフラグは、ちゃんと回収するんだぞ。」

・・・。  
・・・。

「どういう意味ですか？」

「まんまの意味だ。オイシイところはちゃんと抑えていかないと  
な。」

「・・・先生、何かこう、色々台無しですよ。」

春の陽気を思わせる、柔らかな太陽の日差し。そして、石畳が延々と続く街道の脇には、赤や黄色の花が咲き乱れていた。

ここに来て三ヶ月くらい、季節が移り変わってもいいようなもの  
だけど、ずっとこんな感じだった。

日本では、四季があるのが当然。そう思っていたが、ここは異世界、四季が無くても驚くことではないのだろうか。

一人、どこまで続くかわからない道を、トボトボと歩く。

当然、車や、バスなんか無い、あるのはタクシーの代わりになる  
馬車。

使いたいのは山々だけど、この世界のタクシーは馬鹿みたいに高く、少しの移動でも、一泊宿を取れるくらいの値段がする。

ギルドの依頼で、移動するときは、代金は、ギルド持ちなので、  
その辺は気にしなくていいのだけど、個人で頼むと、それは目玉が  
飛び出るくらいの値段になる、最初、私用で馬車を使った時、先生  
が代金を払っているのを、横目で見て思った。

なので、先の見えないこの旅では、なるべく無駄な出費は避けたい。

再び足を進め、小一時間くらい歩いたところで、とうとう膝にきた。

「イタタタタ・・・今までの運動不足がたたったか、異世界に飛ばされるってわかってたら、ジムとかに通ってたのになあ。」

一人呟き、地面に腰を降ろした。

今までの、物に溢れた生活から一変、電気も水道も、ガスもない、この世界。

慣れたとはいえ、不便極まりなかった。

とはいえ、不満を漏らしても、始まらない、ここに座り込んでいても、人っ子一人いない、この街道では誰も助けてくれないのだ。

とりあえず、歩くか、そう思い、地面に手をついたとき、柔らかい草の感触が伝わった。

その時、急に閃いた。

「もしかしたら・・・もしかするかも。」

体勢を変えて、地面に両手をつき、頭の中に、自転車をイメージする。そして

「・・・サブスタンスチェンジ。」

言葉に呼応するかのように、掌が当たった草が光を帯び、形を変化させていった。それが、みるみるうちに、私の想像した自転車へと形を変えていく。

「フフフフ、大成功！カゴ付き、六段変速、電動アシストが付

けられなかったのは残念だけど、やってみるもんね。」

と、意気揚々と、草で出来た自転車にまたがった瞬間。

【ベシヨッ。】

私の重みで、真ん中から『く』の字に折れ、腰から地面に落ちた。

「イテテテテ・・・やっぱダメか、いや、でも歩くのは嫌だ、形は何とかなる、後は強度か。」

その後、試行錯誤を繰り返し、呪文を唱え続ける私

「サブスタンスチェンジ！」

【べしよっ。】

「これでもか！サブスタンスチェンジ！」

【べしょん。】

「サブスタンスチェンジいい！」

【べしよっ。】

半ばヤケになりつつ、強度と、進むような構造を考えながら、呪文を唱える、六段変速は諦めた、カゴも諦めた、ブレーキの構造な

んで、知る由もないから、諦めた。

回る車輪と、方向を決めるハンドル、それに乗るための椅子、それに意識を集中して、やっとのことで、自転車っぽいものが出来た。

「後は強度か、所詮、素材は草だからなあ……。あれ？つてことは……」

ハンドルを握り、再び

「……サブスタンスチェンジ」

物質変換の発動状態を保ちつつ、椅子にまたがる、うん、今度は潰れずにいい感じだ。

そして、試行錯誤の末、構造を思い出し、作ったペダルに足を乗せてこぎだした。

ちよつと乗りづらいけど、十分なスピードが出る、この草で出来た自転車の出来は上々、これで次の街まで一気に行こう。

『失敗すればするほど、成功に近づいている。』

どこかの発明家が、こんな事を言っていたような気がする。

まったくその通りだなあ、体を撫でる温かい風を全身に受けつつ、何度も地面に打ち付けた腰を摩りながら思った。

つづく

#### 【第4話・戦ってみようか】

ついさっき、私が物質変換の力を使い、草で作った自転車で、石畳が延々と続く、道を走った。

持ち物は、お金と、ちょっとした、小物と、当分の着替えを入れた、両掌を広げたぐらいの、小さな茶色の鞆。

地面の凹凸で体が揺れる度に、その振動に合わせて、体にぶつかりながら、揺れていた。

しかし、この小さな鞆。見た目とは裏腹に、驚くほど物が入るのだ。

そして、更に驚くことに、いくら物を詰めても、重さは変わらない、学生の時に習った、『質量保存の法則』そんなものは、この、異世界には通用しないらしい。さすがファンタジーといったところだろうか。

簡単に言うと、未来のロボット猫が腹につけている、『四次元ポケット』のバッタもんみたいな感じだと、私は捉えている。

何でも、変換師のギルド御用達らしく、所属する人は、みんな持っていた。

本当に、これ一個で、事が足りるのだ。

「どうにかして、日本に還る時、持っていけないかしら。」

一人呟いた。

その間にも、ゆるやかに起伏が続く、街道を、風を切りながら、ひた走る。

行けども行けども、道と、草原と、遠くに山。

今日は野宿か・・・そう思った時、突然、私の行先を塞ぐように、全身を覆う茶色いマントに、フードを目深に被った何者かが、両手を広げ、立ちはだかった。そして

「その人間！持っているものを全て置いて行けえええ！」

無理矢理、ドスの利いた感じで声を出そうとしている、ちょっとした間の抜けた、男性のものとしては、ちょっと高い感じの聲が、響いた。

・・・こんなところに追いはぎとは、うん、やっぱりファンタジーだ。そして、こういった人種とは関わり合いにならない方が得策とりあえず、止まって方向転換、本気で自転車をこいたら、相手が陸上のオリンピック選手じゃない限り、追いつかれることはない。それじゃあまず、落ち着いて止まり・・・

って、ブレーキ作ってないじゃない！

これは、自分の想像を形にした、自転車。

自転車を止める構造の知識も、道路交通法も、人気も無い所にブレーキなど無用、更に、私のここでの生活にも、ブレーキなんて要らない。

まさかまさか、こんなところで、捨てたものが、必要となつてくるとは。

通称、『大掃除後に、捨てたものが結構重要になるイベントが起る法則。』

ファンタジーの世界まで、何でそんなことが適用されるのか。そして、悪いことに、ここは下り坂。当然、スピードは上がる一

方。

一瞬、コケて、止まるうかとも思ったけど、そんなことをしたら、怪我するわ、動けないわで、追いはぎに、プレゼントを渡してしまうことになる。

そうなる、私の取るべき手段は……。

突っ切るか。

幸い、道幅は狭くはない、フードの男の脇をすり抜け、そのまま加速。

これしかない、そう心に決め、踏んでいるペダルに力を込めたその瞬間。

【ズルう。】

足がすっぱ抜けた。大きく体勢を崩す私。立て直すことに必死になっている間にも、どんどん、フード男との距離が縮まってきた。

しかし、そんな私の姿を見ているにも関わらず、よっぽど体力に自信があるのか、避けるそぶりすら見せない。

……しょうがない。

「ちょっとそこどけてー！自分の意思じゃ思うように止まれないの！」

もう本当に避けないと交通事故発生。そんなところまで来て叫んだ言葉に。

「・・・嘘。」

そうフード男が声を漏らしたその瞬間。

【ガンっ！】

私は、彼に体当たりをする格好で、ぶつかっていた。

「って、イテテテテ・・・」

ぶつかった拍子に、世界がグルグルと回り、体が地面に落ちた。幸い、石畳を避け、草原に落ちたから、打撲くらいで済んだみたいだ。

ゆっくりと体を起こすと、私の物質変換の力が及ばなくなり、ただの草の山になった、自転車だったもの。

そして、その脇には、さっきのフードの男。しかも、ゆっくりと起き上がろうとしている。

その時、腰の辺りに、金属で出来た、光るものが見えた。

何だろう、目を凝らして見る、そして、その焦点が会ったとき、一瞬で血の気が引き、背筋に冷たいものが走った。

あれは、もしかして、もしかすると『剣』というヤツじゃ・・・。

ゲームの世界で、標準装備といっていいほど、ポピュラーな、ブ  
ンブン振り回すアレだ。雑魚敵に向け、ボタンを連打すると、斬ら  
れたモンスターが、真っ二つになるアレ。

今度は、間違いなく、それが私に向けられる。

一瞬、腰が抜けそうになったが、這い蹲るように逃げた。  
それと同時に、フードの男も、腰から剣を抜くと、ゆっくりと追  
いかけてきているのが、視界の端に映る。

もう泣きそうだった。どうして、どうして私がこんな目に。  
しかし、泣いてもわめいても、助けは来ない、先生も、来ない。

「ちつくしよー！根性だ！根性ーっ！」

頼れるのは、己の力のみ、自分を奮い立たせるように、空に叫び、  
辺りを見回す。

すると、少し先の方に、私の腰くらいある、草むらが広がってい  
るのが見えた。

とりあえず、ここでやりすごそう。

一気にそこに飛び込むと、大勢を低くして、足音を立てないよう  
に、奥へ、奥へと進んだ。

そして、少し暗くなっているところを見つけ、腰を降ろして息を  
潜めていると。

【ガサガサガサ・・・ガサガサガサ・・・】

もう一つの足音、さっきの男が追いかけてきたのだ。

その音を聞いた瞬間、心臓が高鳴り、呼吸が乱れていくのがわかった。そして、言い表しづらい恐怖が私を襲う。

絶体絶命とはこのことか、しかし、まだ見つからない、考える、考えるんだ、私。・・・ん？

ここは草むら。言うなれば『ずっと私のターン』

とある少年で言うと、『強の壺』だろうが、『ブラッ マジシヤン』だろうが召喚し放題なのだ。

となると、まずは、リーチの長い武器を作るか。地面に手を置いて、呟く

「・・・サブスタンスチェンジ。」

地面の草が光り、形を変えていく。

モチーフは『悪魔城ド キュラ』で主人公が使っているアレ。そのゲームは、そこそこやったことがあるので、想像は簡単だった。少しすると、ゾンビだろうが、ドラキュラだろうが、真つ二つに出来そうな鞭が出来上がった。

「これで、よしっ！」

武器が出来れば、こっちのものだ、後は、この視界の悪い草むらを出て、石畳の上を避けつつ、丈の低い草原で戦うのみ。

大丈夫、きつとやれる、自分に言い聞かせ、草むらを飛び出た。急に開ける視界、そして

「もう一つ、仕上げといきますか。」

鞭を片手に、体勢を低くしながら、地面を撫でつつ、呪文を唱えた。

するとその時

「やっと見つけたぜ、女！」

さっきの男の声がした。

振り向くと、よっぽど顔を見られたくないのか、まだフードを深くにかぶったままの男が立っていた。

とりあえず、無駄だとは思いつけど、威嚇だけはしておくか、そう思い、さっき草で作った鞭を構えながら、思いつきり目を見開き叫んだ。

「リステルウゝカベルネだよゝ・・・アゝゝゝゝゝゝゝゝゝ！」

全国のにしおかさん、ごめんなさい。

今までの行動を総合すると、このフード男は天然。

めい一杯の変顔で凄めば、もしかしたらもしかするかも、そう思った矢先

「お姉ちゃん、それはどうかと思う。点数をつけるとするならば、2点。当然、100点満点中な。」

フー・・・。とため息をつきながら、両手を広げ、『やれやれ』みたいなポーズをしていた。

天然だと思っていたフードの男に、冷静に突っ込まれ、我に帰った。いくなれば、犯罪者ごときに、『しょうもない娘』みたいな烙印を押されたかと思うと、急に恥ずかしくなってきたて叫んでいた

「ちつくしよ～～～～」

全国の小梅さん、ごめんなさい。

つづく

## 【第5話・命をあずけてみようか】

目の前に立ちはだかるフードを被った追いはぎ男が、抜いた剣を下げた状態のまま、私との距離をジリジリと詰めてきていた。

多分、剣の届く間合いまで詰まったところで、一気に勝負を決めるつもりなのだろう。

そうはさせまいと、私も、慣れないながらも、必死に草で作り上げた鞭を振るう。

しなやかに伸びた鞭の先は、たまにはあるけど、男を捉えるように伸びる。後一步のところ、当たりそうなのは、何回かあったものの、さすがに、追いはぎを生業としているのだろう、少ない動作で、ヒラリ、ヒラリと交わっていた。

しかし、ここまでは想定範囲内。所詮、付け焼刃の鞭さばきでは、相手を捉えることなんて、出来ない、そう踏んでいた。

私の目的は別にある、それは。戦う前に、地面を撫でた、あの動作。

物質変換の力を使い、瞬時に、草の畏を張るためのもの。

とはいえ、大掛かりなものは、できないので、草と草の先を結びあわせる、簡単なもの。そこにうまく足がはまると、見事にずっこける。そこに攻撃を加えるつもりだ。

昔、忍者が使っていたとも言われる、足止めの畏。

今の攻撃は、男を畏だらけの場所に、誘導する、いわば『罠』

そこ場所まで、誘導出来たら、今度は上半身を狙って、鞭を振るう、それは勿論、注意を地面から離すため。

そして、畏は一杯あったほうが、かかる確率も高くなる。畏の場所まで誘導するまでの間、下半身を狙うフリをして、体勢を低くした時に、空いた手で、地面を撫でて、即座に呪文を唱える。

そのうち、男を毘の張ったエリアに入った。すると

【ズデッ！】

男が見事にずっこけた。

不意をつくことが出来たのか、持っていた剣を放り出し、無様な格好で、大の字になっている。

その隙を逃さず、鞭を叩き込んだ、それが、背中に当たると

「いでえっ！」

草とはいえ、やっぱり痛いのか、男が悲鳴を上げた。それにしても、この声、悪党に似つかわしくない、間の抜けた声だなあ。

いやいやいや、そんなことを、思っている場合じゃなかった、ここは、ラッシュをかけないと。

そう思い直し、鞭を繰り出した時、男が地面を転がり、それを交わした。

そしてまた、落ちていた剣を拾い上げると、また、ジリジリと、間合いを詰めてこようとする。

今度は、毘を警戒しているのか、地面を一步一步、確認しながら、近づこうとしているようだ。

しかし、このままでは、明らかに、決定打の無い、私の方が不利、今度運良く転ばした時に、一気に近づいて、草で縛り上げよう。そのためには、もう少し、毘が要るな。

そう思い、再び、下半身を狙う振りをしながら、地面を撫でたその時、手首に刺すような鋭い痛みが走った。

「痛っ！」

なんだろう、痛みが走ったところを見ると、手首がうつすらと、

横一文字に切れていて、そこから、血が滲<sup>にじ</sup>んでいた。

そして、思わず、傷口を舐めたその時、視界がぼやけてきて、息苦しくなってきた。

「あ……うあ……。」

そのうち、立っているのが辛くなる、それと同時に、体が燃えるように熱くなってきた。もうだめだ、立ってられない、でも、ここで倒れたら、私は、間違いなく殺される。

必死に、立っていようとするものの、だんだんと、膝に力が入らなくなり、その場に倒れ込むと、動けなくなってしまった。

もう、立ち上がることは、出来ないし、目もかすんできた、それに、体も熱い。私、どうなっちゃんだろ。

と、その時、目の前に、剣が突き立てられた。そして

「娘、荷物を差し出せ。」

さっきの男の声がした。

私はもう動けない、『死』というものを、肌で感じたものの、恐怖の前に、うすぼんやりする頭が、それを和らげていた。

もう、どうにでもなれ、そんな思いで言った。

「好きにしたら……いいわ。」

すると

「ふん、何があったかは知らんが、いきなり大人しくなったな、じゃあ荷物は頂いて……ん？」

男が、何かに気づいたような声を出した。そして続けた

「娘、お前、もしかして、この草に触ったのか？」

「この・・・草？どの・・・草よ。」

そう言つと、私の頭をグリーンと回転させた、すると、目の前に、何とも言い難い色の、棘がいつぱい飛び出た草が見えた。

「見えるか？この赤と、緑と紫がまざったような、ドドメ色のコレだ。これはな、『サワルトキマズイコトニナリ草』といってな、猛毒を持っている草だ、この辺じゃあ、ガキでも触らんに、何で触った？おい！聞いているのか？」

男が、何か慌てた様子で、まくし立てっていた。

「知らない・・・わよ。」

声を振り絞るように言つと、男が私の体を調べ始めた、そして

「手首を切ってるな、手の色が変色してきている、しかも、怪我したところの血を舐めたな。これはまずいぞ・・・。」

「まずい・・・？」

「端的に言うぞ、このまま放っておくと・・・だ、お前、死ぬぞ！」

言葉尻になるにつれ、声を荒らげる男の口から、衝撃的な言葉が飛び出した。

「嘘・・・？」

「嘘じゃねえ！お前、今まで気付かなかったが、『変換師』だろ？なら、解毒薬とか持ってたねえのか！？」

「持ってた・・・るわけ・・・ない・・・で・・・。」

薄れゆく意識の中で、私の耳に、男が『なんてこった・・・』と言う声が聞こえた次の瞬間、私の体が宙に浮いたような気がした。そして、私の霞んだ目には、男の胸元が見える。それを見て、思った。私、抱え上げられてるんだ。

「どうして・・・？」

掠れるように呟くと

「どうもこうもねえ！荷物は欲しかったが、命となると、話は別だ、俺には重すぎて持てねえ！それに・・・死にそんな人間を放っておくなんて、そんなことは出来るわけねえだろ！俺が何とかしてやる！それまで絶対死ぬなよ！約束しろ！破ったら、お前の荷物、全部いただくからな！」

「・・・何、言ってるの・・・よ。」

「うるせえ！いいか、良く聞け、気絶してもかまわねえから、俺の首をしっかり掴んでろ！わかったな！」

そう言つと、今度は、頬に、硬い感触が伝わった。

多分、彼の背中なんだろう、言われるがままに、彼の首に腕を回しギョっとしがみつくと、私の熱く、火照った体を、冷たい風が撫

でていた。  
だんだんと、遠のく意識、そのうち、私は暗闇の中に、溶けていった。

気がついた時には、目の前に見慣れない天井が映った。  
まだ、頭はボーっとしている。そういえば、追いはぎと戦って、何か、変な名前の毒草の毒にやられて、追いはぎに背負われて・・・

そこまでの記憶しかなかった。  
ゆっくりと起き上がると、薄く、青い服を着ていた。それを見て思う、ここは病院なんだろう。

「は、はは、異次元の世界も、入院するときのパジャマは一緒なんだ。」

だんだんと、意識がはつきりとしてきた、とりあえず立ち上がり、窓の外を見た。

眼下に広がる街並み、窓の下には、公園らしきものがあり、数人の子供たちが遊んでいるのが見えた。ここは、二階なのか。

そして、ベッドの方に、目をやると、私の荷物と、今まで着ていた服が、きちんと置いてあった。

「あれ？荷物が残ってる。あの追いはぎさん、何で取っていかなかったんだらう？」

思わず口にしたその時。ドアの開く音と共に、二人の人影が見えた。

一人は、白衣を着た、明らかに『医者です』みたいなお爺さん、

そして、もう一人は・・・

犬？

それにしては、人間みたいに、服を着て、しかも立って歩いているが、どうみても犬にしか見えない、しかも、ハスキー犬。

顔の中心が真っ白い毛で覆われていて、目の当たりからは毛の色が、真っ青で、ちよつと違うけど、以前、テレビで、北海道の犬ぞり特集を見ていた時に、ソリを引いていた犬、まんまの姿だ。

そんなことを思っているとは、知る由もなく、追いはぎ犬は、医者と話していた。

「助かったぜ、先生、そしてありがとうな、獣人である俺の話を信じてくれてよ。もしかしたら、叩き出されるかと心配したぜ。」

「何、顔を見りゃあの、すぐにわかるわい、まあ、お主ら獣人は、色々と難しい立場じゃからの。でも、お主の判断は間違つてなかったぞい、もう少しここに来るのが遅かったら、お嬢さんは死んだっただかもしれないの。」

その言葉を聞いて、例の草で切った手首を見ると、未だ、そこから、肘にかけて、真っ青のままだった。

そのうち、先生が、『じゃあの、連れのお嬢さんに、よろしくの。』そう言いつつ、部屋から出ていった。

それを見送るように、眺める犬。先生がドアを締めると同時に、ベッドに腰掛ける私の傍にあった、丸椅子に腰掛けると、ゆっくりと口を開いた。

「娘、気分はどうだ？」

「あ、ええ、大丈夫みたい。アナタが助けてくれたんでしょ？ありがと、でも狙いは私の荷物のはずなのに、どうして持つて行かなかったの？アナタは追いはぎなんですよ？」

そう訊くと、犬人間は、気まずそうに、首の後ろを掻きながら

「まあな、でもよ、目の前で人が死んでいくのは見てられん、それにお前と約束しちゃったんだよな。あの時、つい、言っちゃったんだよ、『死んだら荷物はいただく』ってな。見事に生き残っちゃったお前からは、荷物は貰えねえよ。」

・・・この人、良い人といえば、良い人なんだけど、やっぱり天然だ。言うなれば、出たての芸人系。

そして、気になるのは、その風体、まんま犬なのだ、掌とかはまだ、確認出来てないけど、絶対肉球とかあるに違いない。

その思いが、ついっつかりド直球な質問をしてしまった。

「ねえ、アナタ、もしかして犬がベースになってるの？」

ヤバっ！っと思った時にはもう遅かった。

とあるアニメで、主人公の少年が、ワニ人間に『ワニ』って言うたら、激怒したんだっけ。

仮にも、命の恩人に、何てこと言ってるんだろ、私。

勿論、彼は激怒するだろう、そう思っていたのだが、その犬人間はキョトンとした顔をしながら

「イヌ・・・？何だそりゃ？始めて聞く名前だな。お前の知り合いか？」

ああ、この世界には、『イヌ』という動物が存在しないのか、ああ良かった。まあ、存在していたとはいえ、呼び方が違うんだろうな、何せ、異世界だもの。

それを聞いてちよつと安心した、とはいえ、どこまで犬なのか、知りたくなって、質問を変えてみることにした。

「ええと、ちよつと質問していい？」

「何だよ。」

「好きな食べ物は何？」

「何だよ、そんなことか、俺が好きなのは・・・肉だな。」

「そう、もしかして、全身をブラッシングしてもらうのか、結構好きじゃない？」

「良く知ってるな、ブラシは硬めが好きだぞ。」

「最後の質問。趣味は？」

「散歩。」

次々と投げかける質問に、何も疑うことなく、平然と答えてくれる、彼について思った。

うん、犬に決定。

un

## 【第6話・話してみようか】

「それで？アンタ、どうしてあんな所で、追いはぎみたいなことやつてたのよ。」

着替えを終えて、旅支度を終えた私は、まだ、その場に居た、犬人間の追いはぎさんに聞いた。すると

「・・・腹、減つてたから。」

「はあ？」

「いや、その、アレだ、本当は、ちよつと脅かして、小金をせしめるつもりだったんだ、嘘じゃねえ！別に、命を取ろうなんて、思つてなかったし、本当、ちよつとだけ、二、三日食えるくらいの最低限だけ貰うつもりだったんだ！悪意はねえって！」

いや、追いはぎにしても、カツアゲにしても、悪意が無いってことはあるのだろうか？

とはいえ、この犬人間が、根っからの悪人だとは、思えなかった。

私が、毒にやられて、倒れた時、必死に何とかしようとしてくれたし、実際、何とかしてくれた。

それに、命の恩人でもあるんだよな、この人・・・いや、犬か。

「ふう・・・。しょうがない、とりあえず、ご飯くらいは奢つたげるわよ。アンタが襲つて来なければってことは、置いておいて、命を助けてくれたことには、変わりはないからね。」

すると

「マジでか！そりゃあ助かる！嬢ちゃんが目を覚ますまでの間、最後に取りっておいた非常食も、食いつぶして、昨日から何も食べてないんだ。そうと決まれば、行こう！早く行こう！」

そう言うのと、私の腕を引っ張りだした。

「ちょっと痛いって！そんなに慌てなくても、ご飯は逃げないから！」

「・・・すまん、本当にお腹がすいててな。」

犬人間の年齢など知らないが、何かこう、雰囲気で、私より年上ということは、何となくわかるんだけど、言動が知性のカケラもないというか、思春期真っ只中の中学生っぽい。

やっぱ、ベースが犬だから、しょうがないのか。そう思うことにした。

「はい、お嬢さん、今回の請求書だよ。」

と、腕の色は変色したままだったものの、動き回ることに、支障はないということで、早々に退院することにした。

そんな私に、会計の時になって、医者から突きつけられた、請求書。

「・・・妙に高くないですか？コレ。」

「そうかの？命の値段としては、安かろうて。色々大変だったぞい、あの『サワルトキマズイコトニナリ草』の毒は、強力じゃて、特殊な薬草を湯水のように使ってしまったからの、ホレ、見てみい、ワシの持つておる薬箱の中身は、お嬢さんの為にホレ、空になってしまったわい。」

そう言いつつ、医者のお爺さんは、笑いながら、薬箱を私の前で開けた。

爺さんの言うとおり、箱の中はほぼ空っぽになっている。

そして、問題は、私の所持金。先生と別れた時に、餞別にと貰った革袋をカウターの前で逆さにして、全て出した。

「はい、毎度。とりあえず薬は3日分出しておくから、ちゃんと飲むんだよ。」

金貨一枚を残し、有り金を、病院に献上することになってしまった私。

半分、途方に暮れてしまったけど、まだ、出費は残っていた。

そう、私の隣で、ご機嫌な大人間の彼に、ご飯を奢らなければならぬのだ。

まあ、これだけあれば、宿は無理だけど、食べるだけなら、なんとかなる。しかし、ここは、初めての街。日本なら、隣町に行こうが、物の値段など、さして変わらない。

コンビ二に駆け込むなり、ファミレスに入るなり、すればいい、しかし、ここは

異世界だ。

何があるかわからない、昔やったことのある、『ドラゴンなんか』というゲームでは、隣町に行った瞬間、宿の値段が倍になっていたりするのだ、この世界でも、適用されていそうな気がして、イマイチ油断出来ない。

なので、この世界の住人に、貨幣価値を聞いてみることにした。

「ちよつとアンタ。」

「何だ？」

「色々な理由で、私の手元は、一枚の金貨しかありません。これで、二人食べなければいけません。どこに行きますか？」

すると

「それだけありやあ十分だ、二人で腹一杯食える。そういえばオマエ、変換師だったよな？変換師ギルドが、経営している酒場へ行こう、そこなら俺も入れるし。」

彼の言葉に何か、引っかかるものがあつたが、彼の案内で、変換師ギルドの酒場へ行くことにした。

「そういえばアンタの名前、聞いてなかったわよね。」

こんがりと焼かれ、肉汁を垂らす丸い肉の塊の両端から、何かの骨が飛び出ている、通称『マンガ肉』。

最初見たときは、それが存在することにびっくりしたけど、案外慣れると普通に思えた。

私の目の前で、それを無我夢中で頬張る犬人間に名前を聞くと、ちよっと手を止めて

「レーベン」ブロイだ。」

そう答えると、また食べ始めている。

あれ？どつかで聞いたことのある名前だな。確かあれは・・・高校の同窓会の二次会で、ちよっとオシャレなバーに行った時にそんな名前を、って。今は、そんなことは重要ではない。

この犬人間は、レーベンっていうんだ、ふうん・・・。

彼の食べる姿を見ながら、先生と一緒にいた時の事を思い出していた。

そういえば、あの村では、私が異世界の人間だということと、混乱していたこともあって、変換師になる訓練は、他の生徒と、別個に受けていたんだよな。

そして、空いている時間は、元の世界に還るための、情報を集めるためだけに使っていた。

だから、こうやって、知らない人と、一緒にご飯を食べたりするのは、皆無とっていいほどだったんだっけ。

「おい、お前、食べないのか？」

思いを巡らせている私に、レーベンが声をかけてきた。

「あ？え？いや、ちゃんと食べるわよ、それに私は『お前』じゃ

なくて、『リステル』カベルネ』、リステルでいいわ。」

「そうか・・・それはそうと、リステル、前からずっと、言おう  
と思っていたんだが、お前は他の人間と、何か違う匂いがするんだ。  
ぶつちゃけ、何者だ？ただの変換師じゃないな？」

出会ったばかりなのに、鋭いことを言ってきた。匂いで嗅ぎわけ  
るとは、さすがは犬と言ったところか。まあ、到底信じて貰える  
とは思えないし、ここで変に隠してもしようがない。なので

「信じてくれとはいえないけどね・・・。」

そう前置きをして、今までのことを、レーベンに話した。

「ふむ・・・そうか、それは大変だったな。」

この世界の住人からしたら、到底信じられないだろうし、笑い飛  
ばすかと思いきや、腕組みをしながら、難しい顔をするレーベン。

「あ・・・れ・・・？今の話、信じてくれんの？」

すると

「嘘なのか？」

「嘘じゃないけど。」

「それなら、信じるしかないだろ？それに、この状況で、俺に嘘ついてもメリットなどないしな。だから本当だと考えるのが普通じゃないのか？」

完全に、私の言うことを、それが当然のごとく、信じているような彼の表情に、ちょっと嬉しかった。

『異世界から来た』。それが、本当のこととはいえ、そのことを口に出すだけで、一歩間違えたら、厨二病患者と間違われそうな発言を、一つも疑うことなく、受け入れてくれたのだ。

「ありがと、信じてくれて。私の話は終わり、とりあえず、食べましょ。」

彼の態度に、何か満足してしまった私は、彼の事を聞くこともなく、二人で黙々と、出された料理を食べた。

徐々に膨らんでくるお腹、そして、二人共満腹になり、食休みも終えて、会計を見たその時、今までの幸せな気分が吹き飛んだ。

「・・・足りない。」

伝票を見て、カタカタ震えながら呟く私に

「足りない？まだお腹空いてるのか？」

とんちんかな受け答えをするレーベン。そんな彼に

「ばかあ！金貨一枚じゃ足りないじゃないの！誰よ！『二人で十分腹いっぱい食べれる』って言ったの！」

そう言いつつ喰ってかかった。その時。

「お客さん、無銭飲食は困りますねえ……。」

薄ら笑いを浮かべつつ、静かに言う会計のお姉さん。その物々しい雰囲気におされ

「いや、あの！そのっ！そんなつもりは……。」

慌てる私、それに追い打ちをかけるように、レーベンまで

「それじゃあ俺も食ったし、そろそろ行くわ。元気でやれよ！」

他人のフリをして、逃げようとしていた、一人で食べていたら、全然お金だつて、足りたのに、コイツが調子に乗って、バカス力頼んで食べたからだ。しかも、私を置いて逃げようとしている。それだけは許せない。

瞬時に、手近にあった店に飾ってある、観賞用の蔦つたに触れ

「サブスタンスチェンジ！」

詠唱と同時に、何本もの蔦が、生きているかのように、レーベンに向け伸び、彼を縛り上げた。そして

「……一人で逃げようたつて、そうはいかないわよ。このままアンタ、丸焼きにして、客に振舞ったそのお金で足りない分、払うから。フ……フフフフ……。お姉さん、火、貸して。」

「わー！だーっ！たっ！たすけて！」

ミノムシのようになった彼が、悲鳴を上げるも

「フッフ、さっきまで、いい気分だったのに、完全にキレたわ、最後に少し、時間をあげる、念仏でも、メガンテでも好きな方を唱えるがいいわ・・・」

と、その時

「何だ、お嬢さん『樹木使い』なのかい？」

店の奥から、男の声がした。

つづく

【第6話・話してみようか】（後書き）

こんにちは、作者です。

今回で、本編に、二人の人間の名前が出てきました。

『リステルⅡカベルネ』そして『レーベンⅡブロイ』

この物語には、ちよいちよい、お酒から取った名前が登場します。  
メジャーなものから、マイナーなものまで、そして、名前の選択基準ですが、ぶつちやけ

ノリです。

あまり深い意味はありませんので、そのへんのところ、よろしく  
お願いします。

## 【第7話・依頼を受けてみようか】

「お嬢さん、『樹木使い』なのかい？」

無銭飲食の疑いをかけられ、抜き差しならなくなり、慌てる私。

その時、キッチンの奥から出てきた、初老の男性が声をかけてきた。

そして、私の足元には、さつき蔦で縛り上げた犬人間、レーベン。

今までの事を見ていたのか、ゆっくりと近づいてくると

「まあ、お金が足りないんじゃないやあ黙って帰すわけにもいかないね、本当は、その分、体で返してもらおうということで、ここで皿洗いでしてもらおうというのが、妥当なわけだが・・・素人に厨房に入られても足でまといになるだけだし、アンタ達が、『変換師』なら、働き方もその方がいいだろう。」

そう言った。

「あ、え・・・っと、すみません。」

「いやいや、謝るのは後だ、とりあえず話を聞いてはくれまいか？」

初老の男は、そう言つと、私達を奥へと招いた。

とはいえ、いつ逃げ出すか、わからないレーベンは、私の変換術の力で、縛り上げたまま、引きずっていったのだけど。

その後、店の奥にある、応接間みたいところに、通された。

「まあ、とりあえず、おかけなさい。」

男性に促されるまま、私は腰かけた、当然、レーベンはミノムシ状態で、床に転がしたままだけど。

私が座るのを見て、男性は口を開いた。

「まずは、自己紹介といこうかね、私は、この食堂のオーナー兼コックの『テカテ』といいます。そして、お嬢さんは？」

「あ、はい、私は樹木使いに属する、リステルⅡカベルネです。」

身分証明書をテカテさんに見えるように、机の上に置きつつ言った。

「とりあえず、それはお納めください、変換師にはとても大切なものだと聞いております。そして・・・床に転がっている獣人の方は？」

彼が、レーベンの方に目を向けた。

うーん・・・どう説明したものか、さすがに、追いはぎとは言えない。

そんなことを言ったら、彼と共に食事をした、私まで素性を疑われてしまう。

とはいえ、出会ったばかりの彼の素性は知らない。とりあえず、お茶を濁すように。

「あ、ええと、何というか・・・彼とは最近、パートナーを組むことになったんです。彼はまだ、変換師の仕事に慣れないのか、す

ぐに、仕事を放っぽり出して、逃げ出そうとするんですけど。ちなみに、名前はレーベンと言います。」

「そうですか、しかし、人間と獣人とは、なかなか珍しい組み合わせですな、色々苦労もあったでしょうに。」

その時、思った、病院でのレーベンと医者 of 会話といい、ここに来る前の彼の『ギルドの食堂なら俺でも入れる』そんな言葉といい、今のテカテさんの言い方といい、完全にベースが動物の『獣人』とは、色々と微妙な立場にあるようだ。

「あ？え？まあ、それなりに、でも、まあ、その、楽しいこともありますよ。」

自分でも何を言っているのか、わからなりつつ、その場を取り繕うと。

「まあいいでしょう。とりあえず前置きはそのくらいにして、本題に入ります。実は、あなたたちに一つ、物を頼みたいのです。」

「はあ。なんででしょう？」

「花を・・・咲かせて欲しいのですよ。」

「花・・・ですか？」

彼の意外な言葉に、拍子の抜けた顔をしていると

「そう、今、リステルさん、『水やつときや放っておいてもそのうち咲く。』そんなことを思ったでしょう？確かにそうかもしれないま

せん、ただ、私が咲かせたい花は、こう、変換師の力を込めないとちゃんと咲かないのです。」

テカテさんの言葉を聞いて思った。そんな面倒臭い花なんて、実際あるんだ。

とはいえ、元居た世界でも、胡蝶蘭（こちょうらん）のように、色々と手入れしないと、見事な花の形にならない、そんな花もあったんだよなあ。

異次元なら、特殊な力を込めないと、綺麗に咲かない花があってもおかしくないのか。

「どうですか？やってくれませんか。私も、ギルドの方をお願いして、何人かの方に来て貰ったのですが、ことごとく失敗されておりました、なかなか進まんのですよ。成功された暁には、食事代を無償、そして、別に報酬も用意させていただきますが、どうでしょうか？」

そう言う、私の方をジッと見ていた。

「ことごとく失敗しているって、どういうことですか？もしかして、花が噛み付いたり、襲ってきたりとか、危険が一杯とか、そういう類のものですか？」

すると

「危険は全くございません、私も何度か同行させていただいたのですが、ハタから見る限りでは、原因がわかりのです。失敗した変換師の方に色々と聞いてみたのですが、一向に口を開いて下さらないので、真意は謎に包まれたままなのです。」

何か面倒な事だということは、わかったけど、とりあえず、花の

邪魔に惑わされることなく、咲かせろってことね。

それなら、何とかなりそうだな。

「わかりました。その依頼、お受け致します。それじゃ行くわよ！レーベン！」

ジタバタし疲れたのか、クタクタとなったまま、動かないレーベンをひきずったまま、テカテさんについて行った。

「これ・・・ですか。」

「いかにも。」

テカテさんの案内で、連れてこられたのは、店の裏手にある畑。見たこともない作物が植わさっていて、店の野菜のほとんどは、ここで作っているらしい。

その脇に、柵でしきられたスペースの真ん中に、何かの花の芽が、ちよこんと土から顔を出していた。

「それじゃあ早速・・・。」

見たところ、襲われたりしそうな気配はない、これなら駆け出しの私でも楽勝、と、柵の中に入った。すると後ろからテカテさんの声がした。

「リステルさん、それでは、咲かせ方を説明しますよ。この花は、

一気に開花までさせてはいけません、ゆっくり、ゆっくりと力を込めて下さいね。途中、花の真ん中の色が変化するところがあります、そこで、一旦止めて、花全体に、色が行き渡るまで、成長させるのは、止めて下さい。とはいっても、力は込めたまままでお願いします。ちよつとでも変換術の力が途切れると、元に戻ってしまいますので。

「

ははあ、そうか、じわーっと力を出したまま、強弱をつけるのか。結構大変なんだよな。

要領としては、ここにくるときに草で作った、自転車に乗っているときに、私の重みで壊れないよう、形を保ち続けるようにした、あの力加減か。

腕まくりをしながら、ゆっくりと茎の部分に触り

「・・・サブスタンスチェンジ。」

力を込める、すると、土からちよつとだけ顔を出していた、花の芽が、伸び始めた。

そして、芽の先の膨らみが、膨らんできて、少しすると、ポンと弾け、白く円い、花びらは異様に多いが、マーガレットによく似た、花を咲かせる。

更に力を込めると、花の真ん中が青みを帯びていった。その時

「リステルさん！成長の力を止めてください！」

テカテさんの声がした。私は慌てて、力を弱める。

そのまま見守っていると、花全体が真ん中の青い色が染み出るように、青く染まっていく。

もう一息、見守る私の前で、完全に青に染まったその時。花の真ん中から、牙がびっしりと生えた、不気味な口が現れた。

「ヒッ！」

思わず身を反らす、しかし、力を止めるわけにはいかない。  
するとその時、花の真ん中から生えた口が、しゃがれた声で喋った。

「お前、小学校の時、消しゴムに好きな人の名前を書いてあるの、本人にバレただろ。」

「!!！」

何で花くんだりが、私の黒歴史を知っているのだろう。

確かに、消しゴムに名前を書いて、ケースで隠し、それを使い切ったら、恋が叶う、そんなおまじないがクラスで流行って、私も当時好きだった男子の名前を書いたことがあった。

そのことを知った、隣の席の男子が、私の隙を突いて、ケースを抜いた上、本人に見せたのだ。

あれから、あの男子とは、卒業するまで気まずいことになったんだよな・・・

「リステルさんっ！」

その時、テカテさんの慌てた声がした。  
しまった！と、思った時には、もう遅く、さっきまで、花を咲かせていたにも関わらず、もとの蕾<sup>つぼみ</sup>に戻ってしまったその花。

「あ・・・。」

「リステルさん、何があったんですか？いきなり力を途切れさせてしまうなんて。」

そうか、テカテさんには、花の声が聞こえていないんだ。

ものすごく小さな声か、もしくは、超音波みたいに、私にダイレクトに届く、そんなところなんだろう。

しかし、何でこの花、私の黒歴史なんて、知っているのだろう。

今まで、失敗したみんな、この花に、思い出したくない黒歴史を言われ、戸惑ったんだ。そして、その後、テカテさんに、何を聞かれても答えられない理由も、何となくわかった。

とはいえ、これを成功させなくては、無一文、というか、マイナスのまま、気を引き締めて、再び挑むも

「f g t ひゅじお p @ : ! !」

「ちゅいお p @ : g h b n m ! !」

次々と、暴露される、私の黒歴史。

その度に、集中力を削がれ、幾度となく、失敗した。

既に、数時間が経過し、力を使い続け、体力も気力も無くなりかけた、その時。

「リステル、俺に任せろ。」

その声に振り向くと、いつの間にかミノムシ状態から、抜け出たレーベンが、横にしゃがみこんで、私を見ていた。

つづく

## 【第8話・花を咲かせてみようか】

「ここは、俺に任せな。」

草相手に、どこで情報を仕入れたのか、心の金庫に、がつちりしつかりしまっておいたハズの、思い出したくない過去を、ほじくり返され、力尽き、項垂<sup>うなだ</sup>れていると、いつの間にかレーベンが横に来て私に言った。

思わず、顔を上げると、私の肩に手を置いた。

「レーベン？」

「リステル、コイツは『セイカクガモノスゴクワル草』と言ってな、元々は、ただの薬草だったんだが、学者が色々といじくって、万能薬として、改造した草なんだ。効き目は抜群なんだが、まあ、アレだ、薬としての効能を追求したあまり、その他の所に、悪いところが凝縮してしまったらしくてな、簡単に言つと、草自身の性格が、ひん曲がつてしまったってヤツだ。平たく言つと、『物凄い美人なんだけど、性格が残念』、そんな感じが。」

「へえ・・・この草つて、薬なんだ。」

「ああ、ちゃんと開花させた時の花びらを、煎じて飲むと、風邪だろうが、切り傷だろうが、イボだろうが、内臓の疾患だろうが、失恋の心の傷だろうが、厨二病だろうが、たちどころに・・・って噂だぞ。」

「・・・すごいね。」

「まあな、でもそれなりの効果を得るんだ、リスクは伴うのさ。」

と、言いつつ、レーベンが、薔つばきに戻ってしまった草の茎をつまんだ。

「あれ？レーベンも、『樹木使い』なの？」

「違いよ、そういえば、お前に言っけなかったな。俺は『変換師』じゃないが、ちよつと特殊な体質でな、リステル、俺の手首を握れ。」

「あ？え？・・・ええ。」

彼に言われたまま、手首を握った。すると

「そのまま、いつもやってるように、力を使うんだ。ただ、今までの半分以下の力だ、やれるか？」

「どういう意味？」

「俺自身、変換の力は使えない、俺の能力は、『増幅』ってヤツだ。」

「ぞうぶく？」

「簡単に言っけとだ、俺自身じゃ変換師の力は使えねえ、でも、俺の体を通すとだ、アラ不思議、能力が倍以上になるんだよ。本来は、力の弱い変換師のための力なんだがよ、こういった使い方も出来るとは思ってなかったぜ。まあ、物は試しだ、俺の心がいくらブレよ

うが、術者はお前、邪魔が入んなきゃ、集中力は途切れないだろ？」

「そういうことなのね……。」

彼の言葉に頷くと、弱めに力を開放する。

『サブスタンスチェンジ。』

すると、私の力に呼応するかのように、蕾が膨らみ、花が咲いた。

そして、案の定、花の中心から、一杯歯の生えた、口が現れる。

「……来た。」

見てみると、その口が、モゴモゴと動くものの、何を言っているのかは私には、聞こえない。

彼に、何か言っているのだらう、すると、彼が涼しい顔をしながら、独り言のように呟いた。

「だからどうした？」

その後も、花が変化をする度に、彼に何かを言っているのだが、当の本人は、人事のように『ふうん。』とか『あー、そんなこともあったつけ、忘れてたな！。』とか、全く気にしていない様子だった。

終始、そんな調子が続き、気が付くと、目の前には、金色の花びらを纏った、一本の花が出来上がった。すると

「リステル、もういいぜ。」

レーベンが私を見て、笑った。

「え？あ、はい。」

彼の言葉に、手首を離すと

「やれやれ、こんなもんか、一体何を言われるかと思ってたけど  
な、あつけないもんだな。」

「レーベン、一体、何を言われたの？」

「ん？聞きたいか？」

「聞きたい。」

「じゃあ・・・」

と、彼が喋り出した。それはもう、聞いている私でも小っ恥ずかしくなるような、厨二病前回の思い出話。

「いや、もういいです、お腹いっぱいになりました。」

「そうか？」

「アンタ、そんな痛い話、よく恥ずかしげもなく人に話せるわね  
え。」

すると

「はあ？リステル、考えてみるよ、大体、生きてりゃ、色々やらかすだろ？みんなそうだ、でもよ、お前、元の世界、『日本』っていったか？友達とか、色々とやらかしてんの、見てるだろ？でも、すぐに思い出せるか？」

彼の言葉に、友達がやらかしたことを、思い出してみる。うーん、イマイチ覚えてないんだよなあ。

そんな私の表情を見て

「思い出せねえだろ？大概、周りつてのは、自分のことなんて、見ているようで見てねえもんだ。さつきすれ違った人すら、ちゃんと覚えてねえくらいさ。今した話だって、明日になりゃ、ほとんど忘れてるはずさ、そんなもん、いちいち気にしてたら、身が持たねえよ。」

そう言って笑っていた。

確かに、いちいち気にしていても、しょうがないのか。

まあ、反省はすれど、後悔はしない、そんな風に思っていればいいのかな？そう、思うことにした。

「おお！ありがとうございます！お二方には何とお礼を申し上げます！いいのやら！」

金色に色づいた花を見て、歓喜の声を上げる、食堂の店主、テカ子さん。

これで、依頼はこなしたことになるんだろう、食事代もチャラに

なつて、無罪放免、しかも報酬も入つて、心もサイフの中身もホツクホク。

しかし、気になるのは、この万能薬と言われるこの花びら、店主はどこを見ても、健康そのものなんだけど、一体、何に使うつもりなのかしら。

まあ、あまり、人のプライベートに踏み込むのは良くないのか、異次元の世界とはいえ、この辺は、一緒にみたいだし。

その後、テカテさんのはからいで、報酬を貰い、ここに併設されている、宿の代金までタダにしてもらった。

もう、願ったり叶ったり、今回は、野宿は避けられないと思っていただけに、私にとっては、ビッグなプレゼントになった。

とりあえず、宿と、食事の心配をしなくてよくなった私は、レーベンに言った。

「ありがとね、レーベン、お陰で助かったわ。また、どこかで会ったら、お茶くらいは付き合つてあげるわよ。」

すると

「何言つてんだ、さっきお前、言つたろ？『彼はパートナーです。』つて。決めた、俺はお前についていく。色々と面白そうだしな。」

「はあ？それって確定なの？」

「ああ、そんじゃこれからよろしくつてことで、リステル、とりあえず、飯でも食つか！」

そう言いつつ、レーベンは私の腕を引っ張った。

「ちよっ！ちよっと何でよ！どうしてそうなのよー！」

そんなわけで、ひよんなことから、パートナーが出来た。

余談だけど、その後、二人でご飯を食べているときに、店の外から若い男性の大声がした。

「いよーっし！体に力が漲るみなぎっ！今日から、バリバリ働くぞー！  
そんで、ついでに彼女も作って、リア充街道まっしぐらだー！もう、  
引きこもり生活とはオサラバするぞー！うっひょー」

その声に続いて

「おお！やっとこの店を継いでくれる気になってくれたか！息子  
よー！」

どこかで、聞き覚えのある声がした。

「勿論さ！父ちゃん、色々苦労かけたな！今日から俺は、この『  
42ピロウ』を大きくして、楽させてやるから！」

・・・うん、すごい効き目だなあ、あの薬。

つつく

【第8話・花を咲かせてみようか】（後書き）

今回のお酒の紹介。

『42（フォーティツー）ビロウ』（ニュージーランド）

ウオツカでね。

今まで、使ったお酒の名前の、元となるものは、飲んだことのあるお酒でしたが、今回は、飲んだことがあります。

まあ、ワタクシ、毎日、仕事をしながら、小説の筋書きを考えつつ、何か物語に使えないかと、酒の並んだ棚を眺めとるわけなんです。

今回のお酒、前々から、ずっと気になっていたんですよ。

デカデカと、『42』って書いてありますし、瓶も綺麗だなーって思っていました。

しかも、種類が多くて、パッションフルーツや、キウイフルーツの風味がつけてあったりします。

何とも不思議な感じのお酒ですが、機会があれば、飲んでみたいと思っています。

それではまた、作者でした。

## 【第9話・買出しにいつてみようか】

「さて・・・と、そろそろフードを被らんな。」

私の隣で、ひよんなことから、共に旅をすることになった、レーベンが街の入口の程近い所まで辿り着いたとき、一人呟いた。

「え？何で？」

それに思わず聞き返すと

「まあ、アレだ、この前まで居た街は、色んな人種が混ざってるところだから、そうでもないんだけどよ、お前も知っての通り、俺ら『獣人』ってのは、色々偏見があるんだよ。ま、どのみちバレルが、街中で動くなら、顔くらいは隠しておいた方が、動き易いってもんさ。」

「そんなもんなの？」

「そんなもんだ。お前は、異世界の人間だから、知らないのも無理はない。」

そう言いながら、フードを目深に被るレーベン

そんな彼を横目で見ながら、私達は、街に足を踏み入れた。

## 【商業都市・ディンプル】

「うわぁ・・・さすがに『都市』と銘打っているだけあって、賑やかな。」

先生と居た村や、この間、依頼を受けた村に比べると、道の整備のされかたも桁違いだった。

今、立っている、街外れまで、きちんと石畳が敷き詰められ、ところどころに、街路樹が植えてある。

繁華街まで、雑草がところどころ生えている『村』とは、大きな違いだ。

でも、元の世界では、どこもかしこも、アスファルトで舗装されていて、それが当たり前だと思っていたけど、こうしてみると、田舎道のデコボコのアスファルトすら、結構人間の手がかかっているんだな、改めてそう思った。

久々に見る、ちゃんとした『街』としての形態、目の前に広がる賑やかな風景に、目を奪われた私は、思わず感嘆の声を上げると、レーベンが、私に耳打ちをした

「だな、俺も足を踏み入れるのは、初めてだが、すごいな。」

「そうなの？何か今までの口ぶりでは、色んなところを見て回っている感じだけど、そうでもないの？」

「確かに、色んな街や、村を回ってきたが、こういった所に足を踏み入れるなんて出来ねえよ、今、ここにこうやって歩いているのも、人間のお前が一緒だからさ。フードを目深に被った人間が、一人でうろついていたら、さすがに怪しいだろ？」

「確かに……。中身が人間だって、怪しいわ。」

「ま、とりあえずここにも変換師のギルドがあるだろ、とりあえず、そこを目指すか。もしかしたら、何らかの情報がああるかもしれないぞ。」

「そうね。」

と、レーベンに促されるままに、私は、変換師のギルドを探し、その辺の人に聞き回った。

勿論、話しかけるのは、私。その間、レーベンは顔を見られないように、でも、私と行動しているという雰囲気を出しつつ、振舞っている。

ややしばらく情報を集めた結果、私達が入ってきた所とは真逆の街の入口近くにあるというところまではわかった。

「ギルドまで、結構距離があるわねえ……。」

思わず呟く私に、レーベンが言った。

「だな、街の規模自体、結構デカいからな、真ん中突っ切って行かないと、日が暮れちゃうぜ、でもなあ……。」

「どうしたのよ。」

「街の真ん中を通る、すなわち、繁華街に足を踏み入れることになるな。」

確かに、今居るところは、街外れ、行き交う人もまばらなため、レーベンも素性を隠しきれているのだが、繁華街といえば、人も多

い、でも・・・

「ねえ、そういえばさ、アンタの素性がバレたらどうなんの？」

まんま『犬』の風体に、最初はびっくりしたものの、一緒に行動しているうちに、気にならなくなった私は、レーベンの素性がバレたところで、大して大事にはならないんじゃないか？そんな思いだった。すると

「パニックになるな、俺も以前、獣人や亜人が見当たらない、こういった大きな街で、顔を晒して歩いていたら、突然、警備兵に囲まれてな、いや、酷い目にあったんだよ。」

「え？何で？ただ歩いてただけでしょ？それって酷くない？」

「まあ、腑に落ちねえが、仕方ないんだ、俺ら獣人は、大方、腕っ節は強いが、頭が良くねえ、ま、たまに学者として、人間に馴染んで暮らしているヤツもいるが、ほんのひと握りだ、大概は野山に縄張りを持って、道行く人を襲ってだな、生計を立てているか、用心棒みたいなことをしてるヤツがほとんどだな。」

「ああ、アンタみたいだね。」

そう、今喋っている、『獣人』のレーベンとの出会いも、彼が、私の荷物を奪おうと襲ってきたことだったんだっけ。

「だー！もうその話はしないでくれ、反省してるって。あれは、お前と出会うちょっと前にな、悪い奴にダメされてな、持ち金全部巻き上げられちゃったんだ、それに、困り果てて、あんな事をしたのは、お前が初めて、天に誓う。それに、お前と一緒になら、食い扶ぶち

持には困らないしな。」

彼の発言について、ふと思った。これって、平たく言うと、『ヒモが出来た』ってヤツか、元の世界に居た時には、ドラマやマンガの世界だけだと思っていたのに、異次元に来て、ヒモが出来るとは、何か、複雑な気分だ。

そんな私の思いをよそに、レーベンは続けた。

「そんなわけだから、獣人ってのは、嫌われ者の代名詞、俺は、こう見えて、結構気が小さいからな、騒がれるのは好きじゃねえ。」

「『気が小さい』ってのが、ちょっと引つかかるけど、まあわかったわ、私もあまり、見知らぬ土地で、面倒事には、首を突っ込みたくないからね。」

その後、あまり目立たないように、とはいえ、不審者に見えないように振る舞いながら、歩を進めると、気がついた時には、街の中心に来ていた。

目の前には、見張り台だろうか、高い棟がそびえ、広間には噴水。

やっぱりファンタジーってのは、街の中心に噴水を置きたがるんだな、不思議だな、と思いつつ、その脇に腰掛け、冷たい水に手を浸した。

周囲を見渡すと、円形上の広間の角を、ぐるっと囲むように、露店が並んでいて、そこからいい匂いがしてきた。

そして、その周りで、追いかけて遊んで遊ぶ、子供たち。  
どこの世界も、似たようなもんね、一呼吸置いたときに、お腹が  
空いてきた。

そういえば、なんだかんだで、何も食べてなかったんだった。

「ねえ、レーベン。」

「何だ？」

「ちよつと何か食べてかない？露店もあるし。」

すると、フードで顔は見えないけど、露骨に嬉しそうな声を出す  
レーベン

「いいね！俺もずっとハラ減ってたんだ、とはいえ、お前が何も  
言わないからさ、いつ言おうかと迷ってたんだ。」

その言葉に、確かに、彼は気が小さいんだな。そう思った。  
彼が、その気になれば、簡単に押さえつけることの出来る、体が  
小さく、力も弱い私に、そのくらいのことも言えずに、気を遣って  
いるのだ。

まあ、でも、彼がそんな性格じゃなかったら、こうやって行動を  
共にすることなんて出来なかったんだろうけど。

「じゃあ何か買ってこようか、当然アンタは行けないわね、店の  
人と、接近したときに、素性がバレちゃうからね。とりあえず何が  
いい？」

「肉！」

「はいはい。」

いきなり単品の指定、一瞬『お子様かつ！』って突っ込みそうになったけど、そんな素直なところが、彼の持ち味だと思うことにした。

レーベンを噴水の前に残し、一人私は、露店を見て回った、見たこともない食べ物、木の器に入っていたり、パンみたいなもの、くるまれていたり、この世界に来て、初めて露天を見る私には、目新しいものばかりだった。

とはいえ、何が口に合うのかわからない、露店の前に出された看板も、何を書いているのかわからない。

この世界は、不思議と日本語が通じるけど、文字だけは違った。何が書いてあるのか、未だにわからないのだ。

「書いてある文字が、読めないって不便よねえ。」

こんなことなら、レーベンも連れてくるんだった、そう思いながら、露店を物色する、と、その中に以前、レーベンと一緒に食堂で食べた『マンガ肉』を売っているところを見つけた。

まあ、これなら、味も知っているし、外しはしないだろう。

「すみません、コレ、二つ下さい。」

露店のオバチャンに言いつつ、お金の入った、革袋を取り出し、台に置く、その時、お金の重みで『ジャリ』っと音がした、その時

「よーよー、姉ちゃん、その袋、重そうだなあ、俺が持ってやるよ。」

男の声がして、いきなり腕を掴まれた。

振り向くと、目深にフードを被った二人組、そのうちの一人が、私の腕を掴んでいた、その手は、フサフサの毛で覆われている。それを見て、気づいた。

「もしかして・・・アンタ、獣人？」

盗られまいと、必死で革袋を掴む私、でも、さっきレーベンが言っていた通り、腕っ節では、獣人に、女の私など、適うはずもなかった。

抵抗もむなしく、手を振りほどかれた勢いで、私は地面に倒されました。

「おいおい、聞き分けの無い姉ちゃんだな、何も盗ろうってわけじゃねえ、『持ってやる』って言うてんだ、ああ!？」

「人の親切は、ありがたく受け取っておくもんだぜ、なあ、兄弟？」

倒れた私に、追い打ちをかけるように、凄んでくる二人組、敵わないとはわかっていても、あまりに腹が立ったので

「ふん、世の中には『ありがた迷惑』っていう言葉もあるのよ。この泥棒。」

言い返すと

「誰が泥棒だ、俺たち兄弟に言いがかりとは、ふてえやろうだ! もう勘弁ならねえ! ちょっとオシオキしないとな!」

その言葉と同時に、フードを捲り上げた、やっぱり案の定、獣人

だ、真っ黒い犬、そして、白と黒のブチ犬。

「ブル・テリアか。もう一匹は雑種つてところかな。犬種について、わからなければ、グーグル先生に聞いてみるのもアリね。」

「はあ？何わけのわからんことを、オレら『ホワイト&マツカイ』兄弟に楯突いて、無事で済むとは思うなよ！ヒーーーーハーハー！」

「アンタ、いちいち言うことが三流なのよ、それに、アンタ達みたいなヤツがいるから、獣人の立場が悪くなんじゃないの？ちゃんとまっとうに働いてみたらどうなのよ！」

私も負けじと、声を荒らげたその時。

「うわーっ！獣人が出たあ！逃げろーっ！」

「警備兵を呼べーっ！」

「ともかく避難だ！女子供は先に逃がせ！」

周囲に居た人が、慌てふためきつつ、逃げ回っていた。

さっきまで、私の相手をしていた、露店のオバチャンも、店の隅に小さくなっている。

しかし、何でこんだけ嫌われているにも関わらず、フードを被っただけなのに、気づかないのだろう。

目の前のピンチよりも、そっちの方が気になった。まあ、ゲームの世界じゃ、一国の王が突然現れた旅人に、何のチェックもしないで、謁見しちゃうんだよな。

日本じゃ考えられないな、小さな会社の社長に面会するんだって、アポを取ったり、面倒なことをしなきゃいけないのにな。

まあ、大らかというか、なんというか、そこがファンタジー世界

のいいところなんだろうけども。

とはいえ、レーベンを置いてきた今、ここは私が戦うしか無いのか。

顔は相手に向けたまま、目線だけで、草を探す。とはいえ、ここはきつちりと、綺麗に整備された石畳、と、いうことは・・・

「・・・草が、無い。」

私の頭の中に、ふと、段差を踏み外しただけで、気まづいことになる、体の弱い、洞窟探検家が、お亡くなりになった時の音楽が、不意に流れた。

つづく

## 【第9話・買出しにいつてみようか】（後書き）

さて、今回のお酒の紹介です。

はじめに

『スコッチ』とは、英国スコットランドで製造されるウイスキーなんですね。

ワタクシは、ウイスキーといえば、メンパブで働いている時、客に一気にさせられて、倒れて以来、あまり飲まなくなりましたねえ・・と、そんな思い出話は置いておいて

まずは一つ目

### 【デンプル】

説明書きには、『軽く飲みやすい、スパイシーな風味が特徴』なんですって。

そしてもう一つ、スコッチではないのですが、今回の悪役の二人組の名前に使ったお酒です

### 【ホワイト&マツカイ】

『ホワイト』とも『マツカイ』とも関係の無い、ライオンのマークが特徴です。

ワタクシ自身、匂いを嗅いだだけなのですが、やっぱりウイスキー臭というんですか？

飲まない人間には、あまり違いはわかりません。

いかがだったでしょうか？

リクエストがあれば、なんなりとお寄せください。

出来る範囲で応えていききたいと思ってます。

最後に

余談ではありますが、長いこと、お酒をたしなんでいるとですね、そろそろシブくお酒を嗜<sup>たしな</sup>みたいなあ、なんて思ってます。

場末のバーか何かで、注文を聞かれた時、低い声で

「ウイスキー・・・ダブルで。フツ。」

みーたーいーなー？

そんな渋いナイスミドルになってみたいもんですよ、ってことで、作者でした。

【第10話・降りかかる火の粉を払ってみようか】

ちゃんか　ちゃんか　ちゃんか　ちゃんか　ちゃんちゃんちゃん。

（脳内で、体の弱い、洞窟探検家がお亡くなりになった音楽に、変換してお楽しみ下さい。）

「終わった・・・。」

獣人二人に囲まれ、今にも戦闘開始！という状況で、私の最大の武器となる『草』がない。

文字どおり、『藁にもすがる思い』、それなのに、石畳で整備された足元には、草一本生えていない。

思わず、倒れ込む私に、男の声がした。

「おいおい、威勢のいいのは最初だけかあ？」

明らかに、私を挑発している。とはいえ、どうしようもない。思わず拳を握りしめた時に、そんな思いが口をついた。

「・・・草。」

その私の声に男達が、あざけるように言った。

「草？草って言ったか？姉ちゃん、怖さのあまり、とうとうおかしくなっちまったのか？」

「兄貴、とつとつコイツ（革袋）貰って引き上げましょうやあ。」

周りも何か騒いでいるみたいだし、そろそろ警備兵とか来ちゃいませうぜ。やっぱり、威勢がいいだけで、所詮は女、何もできやしませんて。」

その声に、顔を上げると、男達は、フードを深く被り、歩き出すとしていた。

私は、フードの裾を掴んで言った。

「・・・待ちなさいよ。」

裾を引っ張られた、悪党の片割れが、戦意喪失していたと、思い込んでいた私の行動に、ちょっと驚きながら言った。

「おっと、お嬢ちゃん、そんな細腕で、まだ何かやるうってのかい？痛い目見たくなかったら、その腕を引っ込めるこった・・・」

その言葉が終わる前に、私のチョップが眉間に炸裂した。

「いでっ！やんのかコノヤロー！」

不意を突かれ、びっくりしたのか、少し身を引きながら怒鳴る悪党。その声が、私の体を劈いた時、私の中で、何かが切れ、沸き上がる衝動をそのまま、悪党に怒鳴り返していた。

「『やんのかコノヤロー！』ってのはウチのセリフや！この場を、このまま不完全燃焼で終わらせるつもりなん！？何や言うてみい！」

「えっ、え、え、――っ！？」

「『えゝゝーっ』て、何間抜けな声上てん！それに何もせんと、勝手に引き上げようとしてん、ウチは『樹木』の召喚師や、何やるにしてもな、草が必要やねんで、ここでウチとアンタ等がドンパチやって、白熱した戦闘を繰り広げてや、知らない間に集まった野次馬にドーン！ドドーン！でワー！みたいなことしようとか、思わへんのか？折角・・・オイシイところなのに、それでもアンタ、ファンタジーの住人？今まで我慢して聞いたとつたら、セリフも登場の仕方も帰り方も月並み、て、ほならいつまでたつても三流から抜け出られへんで？とにかくな、お姉さんvs小悪党って図式が成り立つんやで？それを、アンタ等ときたら・・・何が『警備兵来るから引き上げようぜ』？はあ？何言つてん、芸人なら芸人らしく、オマワリ巻き込んでオイシイところをかつさらう、これが芸人ってモンやろ？そんなブレた芸風が本場で通用する思ててん？アホかあ！」

怒りに任せてPCの画面上だと10行くらいまくし立てただろうか。すると悪党は後ずさりをしながら

「あ、え・・・と、何かすいませんでした。ってゆうか、突然喋り方変わるし、この人何か怖いよ兄い・・・。」

「弟よ、これがいわゆるひとつの『電波さん』というやつだ、風の噂で聞いたところによると、マイワールドの中に引きこもったつきり、帰ってこれなくなる病気なのだそうだ。伝染ると、大変なことになるらしい。」

「と・・・いうことは。」

「やることは一つ、わかるな・・・。」

そして、顔を見合わせ、二人無言で頷いたかと思うと、次の瞬間

『逃げろおおおおつ！』

私のお金の入った革袋を放り投げ、一目散に逃げていった。

「よお、お帰り、ん？何か疲れてないか？」

とりあえず、あれから何とか食料を買って、レーベンの元に戻る私、そんな私の顔を見て、不思議そうに言った。そんな彼に答える。

「え？あ、いや・・・ちょっとトラブルに巻き込まれそうになってん。」

「そうか、無事で良かったよ・・・ってゆうかお前、ちょっと喋り方変わってないか？」

「あ、そうよね、慌てたりすると素に戻っちゃうのよね、まあ気にしないで。」

そう、私は怒ったりすると、関西弁が出てしまう。お父さんは標準語圈の人だけど、お母さんは関西出身。ここ、異世界に飛ばされる前は、周りが標準語だったから、それに合わせて、普段は標準語

を喋っていたけなんだけど。

それにしても、論点が定まっていけないキレ方をした私も悪いが、悪党くんだり『電波さん』と言われちょっと傷ついた。

そんな私の心境をよそに、いつの間にか、私が渡した『マンガ肉』をペロリと平らげたレーベンと言う。

「まあ、無事だったなら、いいさ、でも、今度何かあったらすぐに俺を呼ぶんだぞ。」

「え？アンタ、戦えるの？」

そう、以前、彼に襲われたとき、ちょっと手合わせをした時、身のこなしは、素人ではないとは思ったけど、ズブの素人の私が、何とか太刀打ち出来ていたような、そんな気がしてそう言う。

「何言ってるんだ、リステル、お前、何か勘違いしてるようだけど、追い剥ぎまがいの事をしたのは、お前が初めて、それまでは、用心棒みたいなことをしていたんだぞ。それに、ズブの素人相手に、怪我させるつもりもないのに、本気なんて出せるか。とはいえ、俺が出張る場面が無いのが一番なんだけどさ。」

「ふうん、意外ね、まあでも、この世界で、剣持って戦える人が居るってのは、心強いわ。」

「だろ？だから持ちつ持たれつ、ってヤツさ、これからもよろしく頼むよ。じゃ、行くか。」

そう言って立ち上がった。

「デカいな……。」

「そうね……。」

その後、街外れに移動した私達は、ギルドの場所を確認し、建物の前まで来ていた。

さすがに、大きな街だけあって、人も集まるのだろうか、この街のギルドの建物は、今まで居た村より、はるかに大きかった。

言うなれば、『掘つ立て小屋』対『体育館』。一步中に入ると、夏祭りの会場みたいに、人でごった返していた。

私は、早速、レーベンと一緒に、『樹木』の依頼が貼り付けてある、掲示板の所に向かい、眺めた。

さすがに、今までとは依頼の量も半端なく多い。

掲示板を見ながら歩いていると、不意に誰かとぶつかった。

「キャッ！」

思わず、よろけて倒れたその時。

「てめえ！どこ見て歩いてやがる！」

乱暴な男の声、そしてまた声がした。

「樹木の変換師くんだりが、『ヘッジズ』様の行く道を塞ぐとは……。ちよつと自分の立場つてものを、分かせてやらんな。」

その声に顔を上げると、火の灯ったランタンを持ち、真っ赤なマ

ントを纏った男、その横には、ファイナル何とかというゲームで見たような、ゴブリンの衣装を着た、男、それがベキベキと腕を鳴らしつつ、私ににじりよって来ていた。

ランタンを持っている・・・ということは、この『ヘッジズ』という男は、『火の変換師』、その派手な変換術と、攻撃力の高さから、変換師の中でも、花形とされ、皆、一度は火の変換師を目指すとも言われている。

しかも、生まれ持った火の属性を持っていたとしても、変換師となるのは、すごく難しく、ほかの属性に比べ、人数が少ないという。

そんなことを先生が言っていたような。私は、元の世界に戻ることにしか、興味がなく、変換師を目指すときも、そのまま、生まれ持った属性と言われる樹木を選んだわけなんだけど。

そのうち、ゴブリンの男が、腰を降ろし、私の顔を覗き込み

「おい、『ぶつかってすいませんでした。』はどうした？口があるんだろう？」

そう、嘲る<sup>あざわら</sup>ように言った。

思わず睨み返すと、ヘッジズという男も、仁王立ちで、腕組みをしながら、私も見下ろしている。

ってゆうかコイツ、何様なんだろう、思わず、怒りのリミットが外れそうになるも、ここでまた、関西弁でまくし立てたら、また『電波さん』なんて言われてしまうのだろうか。

どうやら、この異世界では、関西弁は鬼門らしい。

この大勢の中、電波さんだと思われるのは、さすがに勘弁してほしい。何も言えず唇を噛むことしか出来ないでいると

「おいおい、嬢ちゃん相手に、大の男が随分な態度じゃねえか。それに、お前だってよそ見してたのが悪いんだろ？火だか屁だか知

らねえが、恥ずかしいとは思わねえのか？」

レーベンの声がした。そして、私と、ゴブリン男の前に立ちほかかる。

「何だ？ テメエ！」

「まったく、威勢だけはいいな。でもよ、見たところ、お前じゃ俺には勝てねえよ、勝負したいってなら、付き合っってもいいぜ。」

そう言いつつ、鞘に納まったままの剣を腰から抜いて、『ガッツ！』という音と共に、地面に垂直に突き立てた。

その時、フードの裾から、チラリと見えた彼の腕を見て

「貴様・・・獣人か？」

「そうだ、だったら何だってんだよ、コイツは俺の連れだ。指一本でも触れてみる、バラバラにしてやるよ。」

彼も怒っているのだろうか、フードの中から低く『ガルルルル・・・』と唸っているのが聞こえた。その時

「バトラー！ もういい、汚い獣人くんだり相手にしている暇は無い！ 行くぞ！」

赤いマントを羽織った男がゴブリン男に言った。すると

「へ、へい、わかりやした。お前達、命拾いしたな！ 旦那さんの言いつけだ、今日のところは勘弁してやらあ！」

そう吐き捨てる、すでに背中を向けた『ヘッジズ』の後を追う  
『バトラー』と呼ばれたゴブリン男  
何か釈然としないものがあつたけど、とりあえずこの場合は、レー  
ベンのお陰でやりすごしたみたいだ。

「レーベン、ありがと、でもアンタまで酷いことわれちゃった  
ね。」

「なあに、そんなもん慣れてるさ、言いたいヤツには言わせてお  
けばいい。あんな小者に腹立てるなんて、アホらしいだけだ。とに  
かく、お前に何も無くて良かったさ。」

そう言つと私を見て笑つた。

つづく

【第10話・降りかかる火の粉を払ってみようか】（後書き）

今回のお酒の紹介

火の変換師、そして腰巾着のゴブリン男の元ネタとなったお酒です  
ね

『ヘッジズ&バトラー』

スコッチですね。

パッと見、何かこう・・・緑のビンといい、何かスコッチ的な感じがしないなー、なんか、スコッチのバッタもんみたいな何かかなー、なんて思っていましたか・・・

これって、300年の歴史を持つスコッチだったんですね。

関係者の皆さん、ごめんなさい。

これからは、凄いお酒なんだな、という認識の元、眺めることにします。

## 【第11話・パーティを組んでみようか】

「農夫です。」「花屋です。」「力持ちです。」

「は？良く聞こえなかった、もう一回いいですか？」

「農夫です。」「花屋です。」「力持ちです。」

「・・・レーベン、もう私、帰っていいかしら。」

「まあ、とりあえず、何とかするしかないだろう？」

どうしてこうなった・・・。

そう、あれは、変換師ギルドで『ヘッジズ』という、嫌いな火の変換師に絡まれた後、気を取り直して、依頼を物色していたまでは、普通の依頼だと思っていた。

「レーベン、やっぱり『樹木』関係は、シヨボい依頼しかないわねえ、数も少なめだし。」

樹木の変換師用の依頼板前で、ため息をついた。

やっぱり、地味なのがいけないのだろうか、大きな街とはいえ、依頼内容といえば、『芝生の再生です』とか、『道を塞いでいる大木を何とかして』とか、まあ、それはいいとしてだ、やっぱり貰える報酬も少なめ。

さつき、なにげに『火』の変換師用の依頼板を覗いたのだが、どれもこれも、桁が一個違う。なんなんだろう、この差は

「しょうがないさ、お前が思っているほど、この世界の治安は良くないんだ、超攻撃的な能力を持つ『火』の変換師は数も少ないしな、重宝されるんだ。」

私の表情を察してなのか、レーベンが言った。

「まあ・・・無いものねだりをしてもしょうがないか、それに、危険なことは御免だしね。ってなわけで手頃なヤツをこなして、当面の資金を稼がないとね。」

と、物色していたその時

「リステル！何かいいのあったぞ！」

レーベンの声、振り向くと、別の掲示板の前で、手を振っていた。

「レーベン！そっちは私とは関係無い所じゃないの！」

と、彼に近寄ると

「そうでもねえんだ、さすが、デカイギルドだけあって、剣士の俺でも受けることのできる依頼があんだよ、ホラ。」

と、指した方を見ると

「『ペリエ撃退願う！腕に覚えのある方、急募！』」

・・・ペリエ？

何だろう、『ペリエ』って、わざわざ撃退しないといけないってことは、獰猛な何かなのだろう、そのまま依頼内容を読む、この街から、さほど遠くない、村外れの林に群れを作っていて、家畜を襲ったり、畑を荒らしたり、するそうだ。

「林中の戦闘となりや、火は使えねえってことか。それに、誰も受けてねえってことは・・・やっぱりな、多少、危険が伴う依頼にしては、報酬が少なすぎるぜ、まあ、村人が出し合ったと考えりや、これでも相当な金額だろうけどな。」

「とはいえ・・・私の所の依頼よりは、高いわね。」

「ま、文句は言えねえわな。俺は獣人だし、マトモな依頼は受けられねえ、樹木の依頼は報酬が少ない、と、なれば、これっきゃねえか。」

レーベンが、そう言つと、掲示板から依頼を書いた紙をひっぺがし、受け付けに持っていった。

ギルドの依頼ということもあり、移動は手配された馬車だったので、すぐに着くことが出来た。

私達が着くや否や、村人全員が歓喜の声を上げながら、私達を迎えた。

さすがに最初、レーベンの顔を見て、一步身を引く村人達だった

けど、彼が剣士の格好をしているのを見たたん、どうでも良かったのだろう、すぐに、村長の家に招かれ、話を聞いた。

「・・・と、言うわけなんじゃが。」

まんまファンタジーに出てくる、てつぺんがハゲたお爺さん、それが村長、しかも喋り方もRPGに出てくる村長まんまの喋り方。多分、家の隅に置かれた壺とか探したら、『小さなメダル』の一つや二つ、出てくるんじゃないだろうか？

そして、タンスには薬草や、まさかまさかの『おなべのフタ』とか入っているのだろう、後で調べさせてもらおうかしら、そう思っている、不意にレーベンの声がした。

「リステル、お前、ちゃんと話聞いてるか？」

「あ？え？うん、大丈夫、ちょっと考え事してただけ。」

「それならいいが、で、村長さんよ、ギルドで見た依頼内容を見ただが、俺達に何人か、人員を割さいてくれるんだって？」

すると村長さんが

「おお！そうじゃったそうじゃった、既に現場に向かわせている。好きに使ってください。それじゃ、怪我せんと、頑張ってください。」

笑いながらそう言った。

と、いうわけで、現場に着いた私達、村長が声をかけておいでくれた人達と、合流した。

手には、棒やらクワやら持っていて、それとすぐにわかったけど、凶暴な何かを相手にするには、ちよつと不安の残る格好だった。

と、まあ見かけだけで、判断するのはアレなので、自己紹介をお願いしたときの事、その内容が

冒頭。

「・・・帰りたい。」

「まあ、集落の規模が小さいんだ、こんなもんだろ？」

私の落ち込みをよそに、さらりとそんなことを言うレーベン。

「何『それが当然。』みたいに言ってるのよ！こういう時にはね、普通『戦士』『僧侶』『魔法使い』、もしくは『武闘家』、百歩譲って『商人』とかじゃないのよ！ばかあ！レーベン、聞いた？いま聞いた？私は『魔法使い』、そしてアンタは『戦士』のポジションとして、残りが『花屋』に『農夫』に、最後は『力持ち』<sup>ちみもつりよう</sup>って、職業ですらないじゃん！どうすれっていうのよ！これから魑魅魍魎とやり合おうってのよ！？どーすんのよ。これじゃやパーティー全滅街道まっしぐら、気づいた時には教会、神父さんの前で、持ち金半分にされるのがオチよ、フフ・・・フフフフフ・・・」

「リステル、落ち着け。後半は言っていることの意味がさっぱり

わからん。とりあえず、落ち着け。大事な事なので二回言うぞ。」

「だってー！だってー！」

と、半分涙目になりながら、レーベンに訴えかけていると

【ビチビチビチ・・・ビチビチビチ・・・】

目の前の林から、以前、父とたまたま行つた漁港で、ちょうどその時、水揚げされる魚を見た時に、聞いたことのある音がした。

「何だろう、この音・・・。」

林の方に目を向ける、その時

「来た・・・とうとうやってきた。」

「みんな・・・死ぬ気でやるぞ！」

「お・・・おう・・・。」

不安の表情を見せる、村人たち。

もしかして・・・これが噂の『ペリエ』と呼ばれるヤツなんだろうか？

目を凝らしていると、どんどん、その音が大きくなうねりとなって近づいてくるのがわかった。これは・・・相当な数だ。咄嗟に、私は体勢を低くして、草を掴み、いつでも変換師の能力を、発動出来るように、身構えた、その時。

【ズザアアアッ！】

林の中から、飛び出る物体。それが、太陽の光に照らされ、銀色に光り輝いていた。ってゆうかあれって・・・。

『鯉』？

周囲を包む、温暖な気候から察するに、これは『初鯉』。  
いやー、めでたい。今日は鯉のタタキが食べたいね、酒のツマミにポン酸でツルっと・・・って

ばかあ！

つつく

【第11話・パーティを組んでみようか】（後書き）

- ここから後書き的なものです -

今回、季節に真っ向から喧嘩を売る形になった本編でしたが、いかがだったでしょうか？

ワタクシも、初めて知ったのですが、『初鰹』の季語は『立夏』、夏の始まりだそうです。

回転寿司でも、定番のネタですね。ワタクシも、大好きです。

と、ここで

定番となりましたお酒の紹介

とはいえ、今回は『割り物』です。

『ペリエ』

炭酸水です。

ただの炭酸水のクセに、オシャレな小瓶に入っております。ああ憎らしい。

そうそう、この存在を知ったのは、以前、記念日に奥さんと、フランス料理を食べに行った時のこと

車だったこともあり、「どっちが酒を飲むか？」ということになり、じゃんけんの結果、ワタクシが飲むことになり、奥さんは、ハンドルキーパー。

その時に、奥さんが、飲み物として頼んだのが、この『ペリエ』  
最初は、その風体から、レモンジュースか何かと思って、一口飲ませてもらったところ、ただの炭酸水。驚くワタクシに奥さんが

「オット、ペリエってもしかして初めて？」

「うん。ってゆうかただの炭酸水飲んでおいしい？」

「おいしいとか、おいしくないの問題じゃないの、これって、スナックとかで飲まれてるわよ、オット、メンパで働いてたのに知らないの？」

「知らん。」

よくよく訊くと、諸外国の水っていうのは、マズいらしく、炭酸でごまかして、水代わりに飲まれてるのだとか。

ふうん・・・ってなわけで、今に至ります。でも・・・

やっぱりただの炭酸水は何かで割らないとマズいよ。

そんなことを思っとなる次第です。それでは、作者でした。

【第12話・得意なもので、勝負してみようか】

【ザザザザ・・ズザザザザ・・】

目の前の林から、無数の鯉・・いや、この世界では、『ペリエ』  
って言うんだった。

そうこうしているうちに、それが、這い出て来た。

それは、『何でもアリ』のファンタジーの世界とはいえ、百歩二  
百歩譲っても、魚の姿をした生き物が、地面を這う姿に、違和感を  
感じずにはられない。

それが、後から後から林の中から湧き出て、私達を襲うでもなく、  
横を通り抜けると、一直線に、村へと向かっている。その姿を何と  
はなしに眺めていたその時、さっき、『花屋です』と、名乗った男  
の大声がした。

「変換師さん！何ボーっとしてるんですか！？」

「あ？え？」

「アイツの大打進を、止めてくださいって言ってるんですっ！」

「そんなっ！いきなり言われてもっ！」

「もう！どうするんですか！このままじゃ、村がまた、メチャク  
チャにされてしまうっ！」

頭を抱える花屋。それを見て、頭を抱える私。すると

「なあ、『イカクサ草』この辺に生えてねえか？お前、花屋だろ？多少草にも詳しいと思うんだがな。」

レーベンが、間に入って、花屋に言った。

「え？その草なら、珍しい草じゃないですから、その辺に。」

「わかってるんだ、けどよ、それと良く似た草も生えてるんだよ、俺には見分けがつかねえし、嗅ぎ分けようとしても、臭いが混ざっちまって、特定出来ねえんだよ。」

レーベンの言葉に、『そうですね・・・』と、呟きながら、地面をゴソゴソとやる花屋、そして摘んだ草をレーベンに差し出すと

「これでいいんですか？」

「ああ、いいぜ、そしてリステル！」

「はっ・・・はいっ！」

「お前、変換術で、この草をデカくしてくれ。」

「わかったわよ、そんじゃ、サブスタンスチェンジ！」

私の呪文に呼応するように、花屋の摘んだ『イカクサ草』がデカくなっていった。しかし、それと同時に

イカ臭いっ！

周囲に充満するイカの匂い、この草から出ているのだろうか？

例えて言うなら、漁港の側で、おばあちゃんが大量のスルメイカを欲しているような、その、どキツイ匂いと言うのが妥当だろうか。

さすがに、アタリメは好きだけど、この臭いはたまらない。

「ねえっ！レーベン！これって意味あんの！？」

思わずレーベンに言う。ベースが犬のレーベンは、この匂いは相当こたえるらしく、顔を歪めつつ、鼻を押さえながら

「あるっ！ってゆうか酷え匂いだぜ！まあ見てなって！」

すると、さつき、私の横を通り抜けた、かつ・・・いやペリエの集団が動きを止め、私たちに向かってきた。

どんどんと距離が詰まってくる、でも・・・村は救われたけど、私達が救われないじゃない！

「レレレレレーベンっ！こっち来る！こっち来るうううっ！」

「リステルっ！慌てるな！ペリエの狙いはその『イカクサ草』だ！さっさとこの場から離れるぞっ！」

「本当に大丈夫なの！」

「大丈夫だ！ペリエはこの『イカクサ草』の匂いによく似た生き物を、主食としてるんだとよ、名前までは知らんがな。」

あー、いわゆるひとつの『撒き餌』ってヤツか。ってゆうかレーベンって、たまに物知りなのよね。

彼の言葉に、『イカクサ草』を放置して、その場を離れると、ペリエの集団が、そこに群がっていく。みるみるうちに、銀色の塊が出来ていった。それを見て、レーベンがまた

「リステル、今度は大きな網を作ってくれ、これで文字通り、一網打尽ってヤツだな。」

「わかった。サブスタンスチェンジ！」

両手に握った草が、変化して、大きな大きな網へと変化した、後は、コレをペリエの群れに被せておしまい。ばっちり任務完了！するとその時

「お嬢ちゃん、その網、そんな編み方じゃすぐに切れちまうわい。」

私に声をかけたのは、自己紹介で『農夫』と言っていた、お爺さんに近いおじさん。私の作った網を両手で持つと、『ほれ』と言いつつ、ちぎってしまった。

「こんな強度じゃ、折角おびき寄せたペリエに、ちぎられてしまうでの、しかし、草とはいえ、編み方一つで、頑丈になるもんじゃ。」

そう言いつつ、慣れた手つきで、草を編んだ。

「嬢ちゃん、今度は、この編み方をマネして作ってご覧、ワシら

農夫つてのは、草ば使つて、色んなものを作つちやるので、これなら、ちよつとやさつとじゃ破れんモンが出来上がるでの。」

おじさんに言われたまま、編み方を真似して、作る。それが、みるみるうちに、大きくなり、ペリエの集団を覆えるくらいにまでなった。

でも・・・

「この網、どうやって投げよう。」

「あ・・・。」

「レーベン、やってよ。」

「さすがの俺でも、こんなバカでかい網は無理だ。しょうがない、両端を二人で持って引つ張つて・・・」

と、その時

「オイラに任せるだ!」

声を上げたのは、『力持ち』

「アナタ、この網、投げられるの?」

「もちろんだとも、それに、こつただ網くらい投げられんたら、村一番の力持ちの名折れだべ!」

そう言うや否や、みるみるうちに、網をまとめあげ、空中に向かって放り投げた。

それが、大きく広がり、ペリエの集団の上に綺麗に覆いかぶさった。

「やった!」

思わず歓喜の声を上げる私に、農夫のおじさんが

「まだじゃ、アンタの力とやらで、隙間から逃げれんように、網の端をしっかりと、草で地面に固定するんじゃ! もうそろそろ、匂いに飽きたペリエが動き出すので。」

「そっか、わかった。サブスタンスチェンジ!」

・  
・  
・  
・  
・

「無事、捕獲・・・だな。」

ビチビチと、のたうつペリエを眺めつつ、満足そうに呟くレーベン

「そうね、一時はこのメンバーで、どうなることかと思ったけどね。」

「ま、最初、色々とこたわってたようだけど、各々が、出来ることをやれば、何とかなるってことさ。」

するとその時、花屋、農夫、力持ちの三人が寄ってきて、口々に

「今年は被害ゼロってすごいよな。ちょっと『樹木使い』を見直したぜ。」

「そうじゃの、毎年、なんだかんだで被害が出てたからのう。」

「そうそう、でも、姉ちゃんの作った『草の網』凄い頑丈だな。」

そう言つて、成功を喜び合っている。

そういえば、短い間だけど、一緒に立ち向かったこの人達の名前、知らなかったんだよな。

「そういえば、アナタ達の名前、知らなかったわね。私はリステル、そして、彼が私の相棒、獣人のレーベン。」

そう言つと

「俺、花屋の『ガンチア』！」

「ワシは、農夫の『アステイ』じゃ。」

「オイラは力持ちの『スプマンテ』だべ。」

ガンチア、アステイ、スプマンテ。短い間だったけど、みんないい人だったな。そう思い、現場を後にした。

「いやー、はっはっはっ！今年の被害がゼロで済んだのは、まさしく、アナタ達のおかげじゃ、礼を言う。」

なんだかんだで、全ての鰹・・・いや、ペリエを一網打尽にして、村の被害を食い止めた私達は、再び村長の家に呼ばれていた。

「まあ、村が無事で何よりですね。でも・・・あのペリエって、そんな凶暴なんですか？どうみても、あの・・・その、食べたら美味しそう、みたいなの。」

「は？凶暴とは一言も言っておりませんぞ？アレはたまに、住処を変える時に、集団で大移動をしましてな、ところかまわず突進してくるのですじゃ、そのおかげで、家の壁は壊され、畑は滅茶苦茶、家畜も怪我しましてな、困ったわけですね。丁度今時期くらいが、移動時期でしてな、本当は、二三日、様子を見てもらうつもりだったんじゃが、ドンピシャで移動日に当たるとは。」

「はー、陸地を泳ぐとはいえ、回遊魚みたいな動き、やっぱりペーヌは鰹なんだ。それに、あんなのに突進されたら、大きな弾丸が直撃しているようなもんだものね。そりゃあ痛いわ。」

「それにしても、いい働きをしてくれました。ありがとうございます。」

そう言いつつ、村長が深々と頭を下げた。

何かいいことをしたような、そんな気がして、ちょっと気分が良かった。それはそうと、一つ、気になることが

「そういえば、あの大量のペリエ、どうするんですか？食べるんですか？」

「食べる！？とんでもない、あのまま焼却処分して、土に埋めま

すじゃ。」

「ええっ！？勿体ない。私のせか・・・いやもとい、故郷では、アレを加工して、サラダにしたり、ごはんにかけてたり、何か一品足りないときに、重宝するんだけどなあ。」

「は・・・？」

そんなわけで、村人全員集めての、ツナ作りの講習会。  
味は元の世界と、遜色なく、その後、ツナはこの村の名物となりました。

ん・・・？ってゆうか私達、何しに来たんだろ？

【第12話・得意なもので、勝負してみようか】（後書き）

・ここから後書き的なものです・

今回は、すんなりと、話の構図が浮かびました。

当初の案では、鯉の群れは早々にやつつけて、ボス鯉とレーベンが・・・という構図だったんですが、バトルの描写がことのほか苦手なのと、話が暗くなる、普段の本編は、思いつきりコメディで行こうと決めていたこともあり、こういった形で締めることと、相成りました。

バトルを望まれていた方、申し訳ありません。

そのうち、レーベンが大立ち回りをする、そんなところも書けたらいいなあなんて、思ってます。

そして、定番となりました

お酒の紹介のコーナー　　パフパフパフ

今回、村人三人衆の名前として使ったお酒

『ガンチアアステイスプマンテ』

スパークリングワインですね。

マスカットの味、そして香り。飲みやすいです。値段もお手頃  
アルコール度数も7.5度と軽目です。ってゆうか、ワタクシが  
らすると、この手のお酒はぶっちゃけ

ジューズです。

ビンスコでも行けちゃいます。

とはいえ、一気に飲むと、酔いが回るので、ワイングラスでチビと楽しむことをオススメします。

それではまた、作者でした。

### 【第13話・求めてみようか】

「石鹸の匂いが恋しい……。」

「石鹸？何だそりゃ？」

現代日本から、ファンタジーの世界へと飛ばされた私としては、この世界では、色々と困ることがあった。

元々、そんなにサバイバーな生活をしていたわけではないし、経験といえば、学校の炊事遠足くらいだ。

でも、この世界に来てからというものの、毎日がハードなキャンプをこなしているようなもの。

宿に泊まるというのは、あまりなく、基本は野宿。

シャワーなんて無い、風呂といえば、川で水浴びくらい、幸い、この世界は、温暖な気候なので、多少は水が冷たいものの、風邪をひくことは無い。

洗濯も、どうしても洗濯したいと、泣きつく私に、レーベンが『ヨグレガイイカンジデオチ草』という、この世界の洗剤代わりの草を教えてくれた。それを、すりつぶして、衣類と一緒に洗う。

多少は青臭くなるものの、嫌な匂いはしない。でも……

「もう限界っ！どうにかならないの！レーベンっ！」

「どうにかならんのか、って言われてもなあ……ってゆうか日本人ってのは、そんなに綺麗好きなのか？」

「当たり前じゃん！ペン一つとっても、抗菌、そして防臭。年頃の女子からはいい匂いがするものよ。それに引き換え、私と言えば、

例の草の御陰で服からは青臭い匂い。うっかりこのまま還ったら、恥ずかしくて友達に会えないわよ。まあ、アンタは獣臭いのが普通だからいいわね。今、目の前にサントが現れたら、瞬時に洗剤をお願いするわ。」

「何だよ、『元の世界に還りたい』じゃないのかよ。とはいえ・・・あ、そういえば・・・。」

レーベンが、何かを思いついたような声を上げた。

「そういえば？」

「ここ（商業都市で・ディンプル）から少し離れてるが、確か・・・花とか果実のような匂いの洗剤を作っている街があつたな。でも、結構高級品で、貴族とか、王族しか使わんらしい、一般人は、水洗いかこの草を使ってだな・・・。」

洗剤がある！レーベンはまだ、くどくどと、喋っているようだけど、そんなものがあるなら、早く行きたい！彼の言葉を遮り

「行くっ！次の目的地はそこっ！」

「えっ！？でもそこには変換師のギルドは無いんだぞ！？お前、10話ちよつとしか経ってないのに、目的を忘れてないか？」

「いいの、このままだと、目的を果たす前に、乙女としての何かを失ってしまうような気がします。」

「そうか・・・。面倒な生き物だんだな、女子ってのは。」

- 工業都市・ブルーダイヤ -

「うん！これこれ、この匂いよ、私が臨んでいたもの！都市の名前も『金、銀、パールプレゼント』的なキャッチフレーズが合いそうなのが、いい感じだし」

地面まで、石畳とはなっていないものの、多くの人が行き交い、活気で溢れていた。

しかし、喜ぶ私の横で

「リステル、本当にこんな甘ったるい匂いを体から漂わせるのがいいのか？俺には理解出来んが。」

あまり、甘い匂いが好きではないのか、渋い顔をしているレーベン。

「まあ、私の言っている洗剤の匂いとは、ちよつと違うけど、これで十分、とりあえず、当面の分を買いだめしないかね。行くわよ！レーベンっ！」

「おいっ！ちよつとリステルっ！俺まだ、フード被ってねえんだよ！」

慌ててフードを被るレーベンを尻目に、街の中へと急いだ。

「……高い。」

工場直営と思われる、洗剤の売り場に着いたのだが、バカみたいに高い。

私が今、手に取っている服を洗う『ビーズ入り何とか』、これ一個の値段で、何泊出来るんだろう。

「だろ？だから言ったんだ、貴族や王族しか使わんって、所詮、庶民には手が届かねえんだよ。わかったか？」

軽く落ち込む私に、レーベンが静かに言った。とはいえ、ここまでやってきて、諦めるわけにはいかない。

「でもー、でもー、やっぱり欲しいっ！」

日本なら、そこらで数百円も出せば買える洗剤、何でもここまで意固地になっているのかも、自分ではわからなかったけど、やっぱり欲しいものは欲しい。レーベンに、だだをこねまくっていると

「うーん・・・コレ買っちゃうと、この間貰った金が全部飛ぶぞ、体は綺麗になるかもしれないが、次の依頼をこなすまで、飲まず食わず、お前、我慢出来るか？」

「うつ・・・。」

あちらを立てればこちらが立たずとはこのことか。

最近ば、野宿続きで、食べ物といえば、小麦っぽい物を固めた力パンみたいな何か。

そろそろちゃんと塩味のきいたものを食べたい。しかし、体は綺麗にしたい。

どちらを取るか、困った、うーん、困った。こうなったら、レー

ベンに何とかしてもらおう、ここは乙女の必殺技、『上目使いで可愛さをアピールしつつおねだり』大概の男ならこれで堕ちる。思いつきりモジモジしながら上目使いをキッ！と決めつつ

「・・・レーベン、どうしよう。」

これでどうだ！と、渾身の可愛さアピールするものの、当の本人のレーベンったら、訝<sup>いぶか</sup>しげな顔をしながら

「どうした、リステル、腹でも痛いのか？」

畜生っ！最近、気にならなくなったけど、やっぱり所詮は犬っ！色仕掛けは通用しないのかっ！

「・・・何でもない。とはいえ、諦めるしかないのかー」

天を仰ぎ呟いたその時。不意に後ろから声をかけられた。

「そのポーチ、アンタもしかして変換師さんじゃないか？」

振り向くと、エプロン姿の叔母さんが笑顔で立っていた。

「ええ、そうですけど。」

「こんなギルドの無い街に変換師さんとは、珍しいわねえ、何使いなのか？」

「樹木です。」

「あらまあ、随分地味な術を使う変換師さんねえ、変換師を目指

す人も、自分の属性が樹木だと知った途端、無理して属性を変えるか、諦めてしまう人も多いのに。それで、こんなところまで何しにきたの？」

「・・・薄々感じていたけど、樹木使いつてのは、そんなに人気が無いのか。それにしても、言いたいことをズケズケと言ってくるオバハンだなあ。」

「え・・・と、ちよつといい匂いのする洗剤を見に・・・。」

「あらまあ、バカ高くて驚いたでしょ？ウチのお客は、王族や貴族がほとんどだからねえ、変換師といえども、手が届かないのよね。」

「はは・・・ごもつとものです。」

思わず苦笑い、このオバハン『ウチのお客』と言っていたから、多分、工場の関係者なのだろう。まあ、丸々と太って、さぞやいい生活をしているんだろうな。

ともかく、ここで時間を潰していてもしょうがない、さっさと退散するか。そう思い

「それじゃあ、私達はもう行きますので、これで・・・。」

と、立ち去ろうとした、その時

「それじゃあさ、アタシの依頼を受けてくれないかしら、そうしたら、ウチの商品、わけてあげるわよ、勿論、タダで。」

タダ！？

私の体に電撃が走った。

ダダ！何といういい響きなんだろう。思わず脊髓反射で言っていた。

「やります。」

そんな私の言葉に

「おいおいっ！依頼内容も聞かずに即答していいのかよ！」

レーベンが声を上げた。

「いいの、これが、蓋を開けたら危険な依頼だったとしても、いざとなったらアンタ生贄にして逃げるから。」

「えゝ ええええっ！」

「そんじゃ決まりね、あ、そうそう、アタシは『ペシエールジェ』、住んでるところは近くだから、とりあえず後ろの大男と一緒に、ウチに来なさいな、話はそれから。」

そう言つと、ペシエさんは、大きな体を揺らして歩きだした。

つづく

【第13話・求めてみようか】（後書き）

・ここから後書き的なものです・

ワタクシ、以前から不思議だったんですね。

ファンタジーの世界って、やたら汗をかく機会が多いはずなのに、洗濯や、風呂はどうしてるんだろうって。

この世界は、年間を通して、『春』みたいな気候に統一していませんが、体を動かすことが、現代日本より多いファンタジーの世界、そこらへんは、どうしているのでしょうか。

と、そんな疑問を形にしたのが、今回のお話でした。それはそうとして、恒例となりました。

今回のお酒の紹介。

ちよつと物をズケズケと言うオバハンの名前に使った

『ルジエ・ペシエ』

同じ感じの『ルジエ・ピーチ』よりも濃い感じのピーチ系のリキユールです。

これは、素直に美味しいです。まあ、桃缶のシロップ飲んでる感じ？

桃缶好きにはたまらないのではないのでしょうか？

基本、カクテルのベースとして、使われているようですね。

そんなこんなで、工場長でした。

## 【第14話・磨いてみようか】

「じゃあ、俺は街の外で待ってる。」

一人先頭を歩く、ルジェさんの後に着いて行こうとした矢先、レベンが言った。

「ちょい待ちっ！」

くるりと背を向け、立ち去ろうとした彼の、首根っこを捕まえる  
と

「わっ！俺はあまり人間と、関わり合いになりたかねえんだよ、この街には、ギルドは無えし、獣人の姿も見えん。面倒事は起こしたくねえからな。それに、依頼を受けたのは、リステル、お前だろ？」

「だってー、危険な依頼だったらどうすんのよー、か弱い女の子一人でこなせるわけないじゃん。だから・・・お・ね・が・い・ついできて。大丈夫よ、フードを深く被ってりゃバレないって、だから、ねっ」

通じないとはわかっていたが、そでを引っ張りつつ、思いつきり上目遣いで頼んだ、すると

「えー・・・。」

「『えー』じゃないっ！行ってくたら行くのっ！」

そのまま、嫌がるレーベンを引っ張り、ルジエさんが、歩いて行った方に向かった。

「まあ、二人共、くつろいで頂戴な。」

ここは、ルジエさんの家の客間、無駄に広い部屋に、無駄に大きい壺や調度品、まんま『お金持ちですう！』みたいな部屋だ。

そして、私達に、あてがわれたフカフカすぎるソファア、ずっと座っていたら、腰を痛めそうだ。

自己紹介も終わり、その後、出されたお茶を一口すすっていると

「そうそう、依頼の話んだけどさ、その前に、リステルちゃんの相方の・・・そう、レーベンさん、どうしてフードを顔が見えないくらい被ってるのかしら？怪しさ大爆発よ？もしかして、おたずね者か何かじゃないでしょうね？」

ルジエさんが、レーベンに疑いの目を向ける。すると彼が

「とんでもないです、あの・・・ちょっと目にでっかい物貰いが出来てまして、恥ずかしいので隠している次第です、ハイ。決して怪しいものじゃござんせんでおまんがな。」

慌てて取り繕うのだが、何か言葉遣いを変だ。すると

「なんだい、物貰いかい、あ！そうだ！オバサン、いい薬持ってるから塗ってあげようかい。とりあえず、フード取りな。」

出た！オバサンの基本スキル、『おせっかい』。いや、とりあえ

ず彼女を止めないと！

と、思った時には遅く、その、太った巨体に似合わないほどの、俊敏な動きを見せると、レーベンのフードをまくり上げていた。

そして、露になる青いハスキー犬の彼の素顔、それにルジエさんの動きが止まった。レーベンもびくりした表情で固まっている。

「あ……。」

「う……。」

これはマズい！

「あの！その！これはですね！その……。」

するとルジエさんが、ため息をつきながら言った。

「そういうことかい、どうりで、フードを取りたがらないわけだ。」

「

そして、レーベンも

「リステル、だから俺は嫌だって言ったんだ、折角の依頼なのに、これでパアになっただろ？」

そう言ったとき

「何もアンタが獣人を連れてるから、依頼は取り消すなんて、言うつもりはないんだけど。」

ルジエさんが言った。

「え・・・？」

「確かに、この街は獣人嫌いが多いがねえ、アタシやウチの家族別さ、外見で差別するなんて、アホらしいことするかね、こちら、商売人だ、亜人だろうと、獣人だろうと、商売をしなきゃならないそれに、この子と一緒に旅してんだろ？悪いヤツじゃないのは、一目見たらわかるよ。」

「良かった・・・。」

「とはいえ、街中を堂々と歩くのはオススメ出来ないね、この街は、獣人が出入りするのを嫌って、変換師のギルドすら置くことを拒否してるからね、フードを目深に被っていたのは正解。」

そう言って笑った。そして、ルジエさんは続ける

「そうそう、今回のリステルちゃんと、レーベンにやってもらいたいことなだけだよ・・・。」

「はい。」

「鐘の掃除なのよね。」

「はあ・・・。」

私は彼女の言葉に、気の抜けた返事をする事しか出来なかった。

「デカいな・・・。」

「デカいね・・・。」

工場の敷地内にある、大きな大講堂、そのど真ん中の天井に、薄汚れた鐘が吊るしてあった。

ルジエさんが言うには、工場の休憩時間を告げる鐘らしく、長い間、ろくすっぽ掃除をしていなかったせいで、埃が貯まり、綺麗に鳴らなくなったそうだ。

最初は、工員達で、何とかしようとしたものの、場所が場所だけに、ハシゴもかけられず、長い棒の先に、布を巻いて、ツンツンつつくだけ。勿論、そんなものじゃ落ちる汚れではなく、手をこまねいていたというわけらしい。

そして、もしかしたら、変換師なら何とかしてくれるかもしれないと、街に呼ぶ算段をしていたところ、私の姿を見つけた、そういうことだという。

「本当は、水の変換師さんと呼んで、水でもぶっかけて貰おうと思ってただけださ、ま、樹木のアンタがどこまで出来るかはわからないけどさ、ちゃっちゃとやっておくれよ。」

ケラケラと、笑いながら言うルジエさん。

しかし・・・随分と高いところに作ったもんだ。はてさて・・・どうしたものか。

頭を捻る私に、レーベンが言った。

「なあ、とりあえず草でも伸ばしてペチペチやってみたらどうだ？」

「そんなことで上手くいくかなあ・・・。」

「物は試しさ、やってみないことには終わらんぞ。」

「そうね、やってみる、そんじゃ『サブスタンスチェンジ』!」

ここに来る前、道っばたで摘んだ草に、力を注いだ。

・それと時を同じくして、街のとある一角・

「おい、街の中に獣人が入り込んでいるらしいぞ!」

「何だつて!? 本当か?」

「ほんとほんと! さっき、洗剤屋が言ってたんだけどな、妙な女変換師の連れで、フードを被ったヤツなんだけどよ、はつきりとは見たわけじゃないんだが、チラリと見えた顔が、獣人みたいだつて、言ってたんだよ。」

「それで、その獣人とやらはどこ言つた?」

「それが、ルジエおばさんに連れられて、工場の方に向かったつて。」

「またあのオバサンか! あの人、変わってるからな、前も亜人を工員に迎えて、街中大騒ぎになったつてのに、亜人ならともかく、獣人を入れるとは、何考えてんだ!? あの人。」

「とりあえず、獣人なんか、早いとこ街から追い出さないと。ガ

ラの悪い連中の溜まり場になったら、たまらんからな。とりあえず、街で手の空いている連中を集める、万が一、獣人だったら、全力で叩き出そう。」

「わかった、ちょっと皆に声かけてくるわ！」

「・・・ふう、やっと終わったな。」

体中、埃だらけのレーベンが、額を拭ってため息をついた。

「お疲れ様。色々試してみたけど、やっぱり最後は人の手よね。」

そう、彼に労いの声をかけると

「お前はいいよな、下で草伸ばしてただけだもんな。」

「だってしょうがないじゃない、『草ペチペチ作戦』は全くダメだったんだし、やっぱりこういう物は、人の手で擦らないとダメなことよねえ。」

そう、色々試してみたけど、やっぱりダメだったので、結局、草をレーベンに巻きつけて、そのまま、彼ごと上昇、持たせた雑巾で、綺麗に拭くことにしたのだ。

始め、見上げた時に、くすんで、光を失っていた大きな鐘が、綺麗に磨かれて、本来の輝きを取り戻していた。

作業が終わり、地面にへたりこむ私達に、様子を見に来たルジエさんが、すっかり綺麗になった鐘を見て、上機嫌で言った。

「はいはい、お疲れ様。いやー、見事に綺麗になったわね、ありがとうねえ。それじゃおばさん、約束通り、洗剤を好きなだけあげちゃう。」

「いやったー！ありがとうございます！レーベンレーベン！やったね、これで、青臭い女から脱却よ！」

思わず、彼に抱きつく

「へーいへい、ようござんしたねー、俺としては、そんなものより、食い物の方が有難いんだがな。まあでも、お前が喜んでるならそれはそれで良かったのか。」

そう言って、笑った。

「そうね、獣人のアンタにもお礼をしようか。ま、大したご馳走は出せないけどさ、ウチでご飯でも食べてきなよ、アンタのリクエストに応えたいわ、好きな物言いなさいな。」

そんなルジエさんの言葉に、露骨に嬉しそうな声を出すレーベン

「うおっ！？マジか！そりゃあ助かる！そんじゃ遠慮なく言わせてもらっぜ！俺の食べたいものは・・・」

その彼の言葉を遮るように、私は言った。

「肉・・・でしょ？」

「何だよ、わかってんじゃねえか。」

「そりゃあアンタ、単純だもん、フフフ。」

するとルジエさんが、少し力なく笑いつつ言った。

「本当にアンタ達、人間と、獣人っていう不思議な組み合わせなのに、仲いいわねえ。ホント、獣人がみんな、アンタみたいだったら、差別なんてなくなるのにな。ウチもさ、一時、亜人の子がここで働きたいって来たことがあったのよ、アタシ的には真面目そうだし、人も足りなかったから、働いて貰おうと思ったんだけどさ、結局、街の連中に人間じゃないからって、叩き出されちゃってね。可哀想なことしたよ……。」

「えっ！？どうしてそこまでされちゃうんですか？」

「アタシの生まれる前の話なんだけどね、昔、この街は、気性の荒い獣人の集団に襲われたことがあったのさ、けが人もたくさん出たし、建物は滅茶苦茶、再生するまでに、結構時間がかかったんだ。それが根強く残ってるのさ、でもね、アタシみたいにこうやって、長いこと商売やってると、獣人や、亜人の中にも、気立てのいいのが居るってのがわかったのさ。そういう子に限って、人目を避けて暮らしてるのさ。それが、不憫でならなくてね、ろくでもないのも居るけど、みんながそうじゃない、それをわかって欲しかったんだけど、なかなか受け入れて貰えなくてさ。アタシやこの街では変人扱い、ま、慣れたし、商売に差支え無いから気にしてないさ。」

「……。」

「あらやだ、アタシったらすっかり感傷に浸っちゃったみたい、オバサンの昔話は置いておいて、ご飯にしましょうか。沢山つくる

から、二三日飯抜きでも耐えられるくらい、詰め込んで行きなよ。」

そうなんだ、色々あったんだな、ルジエさんも、この街も。

私はまだ、獣人に襲われたこと・・・ってゆうか目の前のレーベ  
ンに現に襲われたけど、なんだかんだあって、命を救ってくれて、  
私を守ってくれて、すごく優しい。

ま、ちよつとバカなのは、しょうがないけど、一緒にいて安心す  
る存在なんだよなあ、レーベンって。

その間に、もう背を向けて、大きな体を揺らしながら、講堂を出  
ようとするルジエさんに着いていこうと、立ち上がったその時、『  
バンッ!』と、扉が乱暴に開くと、数人の男達が、ゾロゾロと入っ  
てきた。

手には、それぞれ、何かを持っている。そして、先頭の男が

「ルジエさん! アンタ、獣人をここに連れ込んでるだろ!? 一体  
どういふつもりだ!？」

怒気の孕<sup>は</sup>んだ大声を上げた。

つつく

【第14話・磨いてみようか】（後書き）

・ここから後書き的なものです・

恒例となりました、今回のお酒の紹介のコーナー！

・・・は、ありません。

尺の都合で、名前を明かすことなく、区切りの所が来ちゃったんですよ。相すみませんです。

そんなこんなで、これからよろしく願いしますね、工場長でした。

## 【第15話・冷静になってみようか】

「アンタ、獣人をここに連れ込んでるだろ！？ネタは上がってんだよ！」

私達が居る講堂の扉が『バンッ！』と、乱暴に開き、数人の男が入ってきた。

その集団の先頭を切っていた男が、怒気の孕んだ声でルジエさんに、言っている。その後ろ、取り巻きの男達の手には、それぞれ、棒キレやら何やらを、携えているのが見えた。

そんな彼らに、ルジエおばさんが返した。

「何だい、大勢で騒々しいね、アンタ、橋のところのバカ息子だろ？いい歳して、ブラブラしてて、それで？働き口は決まったのかい？」

怒鳴られているにもかかわらず、平然と受け答えしていた。

一方、作業の邪魔になるからと、フードを脱いでいたレーベン、咄嗟の出来事に、フードを被る暇もなく、顔を晒したままの彼のこととを、目ざとく見つけた男が、勝ち誇った顔で言った。

「話を反らすんじゃないねえ！アンタのところに、獣人が入っていったって垂れ込みがあって来てみたら、やっぱり連れ込んでんじゃないかねか。アンタ、以前も亜人を連れ込んで、街中に、迷惑かけたのを忘れたのか？組合の方からも、厳重注意を受けただろ？もう、言い逃れはできねえぞ。今度問題を起こしたら・・・わかってんだろうな。」

すると、ルジェさんは、とんでもないことを、言い出した。

「やれやれ・・・『この街から出ていく』って約束だったかね。別に構わないよ、商売なんて、どこでも出来るし、工場なんて、また建てればいいだけの話だしね。」

その言葉に、私は、思わず聞き返す。

「えっ！？嘘・・・でしょ？」

「本当よ、あの男が言っていた通り、亜人の子の件で、組合の方からも、街の方からも、散々怒られてさ、念書まで書かされたんだ。アタシとしては、納得いかなかったけど、当時は、子供も小さかったもので、渋々、受け入れざるを得なかったんだけどさ。今考えても、胸くそ悪いっただけやあしない。」

そう言うと、フン！と、ため息をついた。

「そんな・・・。」

まさか、こんなことになってしまおうとは。

そして、そもその原因は、私にある。私が、我がママを言ったせいだ。この街に入る前、レーベンは、『村の外で待ってる』そう言っただ。それなのに、私が強引に引きずっていった。その結果が、レーベンや、ルジェさんに、迷惑をかける結果となってしまうんだ。

私は、先頭に立っていた男に叫んだ。

「私が・・・私が悪いんだ！この世界のこと、ちゃんと知らないで、突っ走ったせいだ！だから・・・ルジェさんのこと、許してよ

！罰なら・・・私が受けるっ！」

その言葉を聞いた音が『フン！』と嘲るように笑うと

「何、わけのわからないこと言ってるんだ？よそ者には関係無いね、そして、この工場は、丸ごと俺が引き継ぐことになっているんだな！もう、組合とは、話がついてる。明日から、この工場は俺の名前を取り、『グレン・フィデック社』として、汚い獣人や、亜人共が立ち入れない、クリーンな工場となるんだ。ハハ！ハハハハハ！」

男が高笑いを始めた。コイツ・・・最初から、この工場が狙いだっただ。だから、前回の件のことをどこかで知った、このグレンって男が、ルジェさんが、何か問題を起こすことを、虎視眈々と狙っていたのだろう。

そのうち、周りから、声が上がった。

「この薄汚い獣人やろうめ！この街から出て行け！」

「そうだそうだ！ここはお前のようなヤツが来ていいところじゃねえんだ！」

飛び交う罵声と、悪口それがそのうち『出てけ！』の大合唱となり、講堂内に響く。

一方のレーベン、何も言わず、ただ、黙ってその言葉を聞いているようだった。

どうして・・・？どうしてレーベンは何も言わないの？私のせいなのに、何で、私に文句の一つも言わないの・・・？

その思いが怒涛のように、体の中を、渦巻き、暴れ出した、次の瞬間、怒りのリミットが、とうとう外れてしまい

「お前らっ！黙れええええええええええっ！」

気が付くと、男達に向けて、怒鳴っている私がいた。もう、怒りは収まらない、レーベンの優しさ、そして思いやりを知らない、そんなくだらない連中が彼を罵る資格は・・・無いっ！

「ウチのレーベンがなんかした？彼はな、毒にやられたウチを、助けてくれた。ほんで、うちが危険にさらされた時、体を張って、守ってくれててん！獣人がどないの、亜人がどないの、何やがちゃうねん！そないに人間って偉いの！彼の本質も知らんポツって出の人間が、彼のこつてを悪くゆう資格なんてあらへんわ！アンタ達のしうてるこつてこそ、ゴロツキって何やら変わらへんとちゃうの！レーベンはな・・・レーベンは・・・うっ・・・うっ・・・うっ・・・。」

悔しい・・・獣人やちゆうだけで、何でレーベンが、こないなヤツここまで言われないといけへんの？

ルジエさんも、さいぜんよってに（さっきから）黙ったまんまや、悪いのは、ウチ、全部ウチやけに。

その時、男の怒鳴り声と同時に、何かを投げるのが見えた。

「ごちゃごちゃうるせえ！」

彼の投げた何かが、立ち尽くしたままの、レーベンの額に当たった。【ゴリッ】と鈍い音がして、額を抑えたまま、その場に膝をつくレーベン、そこから、一筋の血が流れていた。

それを見て、周囲で沸き起こる、笑い声。

「レ・・・レーベン。」

【プツン。】

ウチは。キレた。

「なんてこと・・・なんてことすんねやあああああつ！」

許せへん、コイツ等だけは・・・許せへんっ！

「木霊変換！サブスタンスチェンジ！」

樹木使いっていえども、操れるんは草ばかりで、木を操る能力はよつてにつきし（からつきし）。でも以前、先生の所で読んだ本の中に、強力な樹木変換術と、イメージの仕方を載せた項目があるの思い出していた。そんな時は、どないせ木は操れへんよつて、読み飛ばすだけで、試したことはなかった。

せやけど、今は、目の前のコイツ等を倒す、そんなだけの思いで、それが口をついた。

そんな時、掌の中に残っていた、草が、みるみるうちに、形を変え、それが、一本の樹木となり、講堂内に枝葉を張り巡らせていく。

それが、男達を縛り上げるように巻き込み、締め上げていった。  
『ギチギチ・・・』と軋んだ音を立てて、なおも、男達を締め上げる。さっきまでの、威勢はどこへやら、急に、もがき、苦しむ声が、周囲を覆った。

「もう・・・ウチは怒った。許さへん、許さへんで！」

夢中やった。このまま壊したる、そう、力を込めた、その時

「リステル！もういいっ！止める！本気で死んじまうぞ！」

不意にレーベンの声がした。それと同時に、目の前が、暗くなる。レーベンがウチのことを抱きしめているんだ。

でも、ウチは止まらないし、止まりたくない、コイツらは・・・コイツらだけは、絶対壊したる！

「止めないで・・・止めないでよ！コイツ等だけは・・・絶対・・・許せへん！」

そう、彼を振りほどこうとした時

【パンッ！】

音と同時に、頬に鈍い痛みが走った。レーベンが私に平手打ちをしたのだ。

そして、私の潤んだ瞳に映ったのは、眉間に、皺を寄せた、彼の怒った顔だった。

「どう・・・して・・・？」

全身の力が抜けて、その場にへたり込む私を軽く抱きしめながら、耳元で静かに言った。

「リステル、俺みたいな獣人を、泣きながらかばってくれて、嬉しかった、ありがとうな。それに、気持ちも痛いほどわかる。でもな、殺しちゃなんねえ。それじゃあ、俺の同族が、犯してきた罪と同じことを、することになるんだ。俺は、獣人として、同族がやつ

てきた罪を、甘んじて受け入れるって決めてんだ。お前との初めての出会いの時は、気の迷いで、あんなことしちゃったけど、それ以来何があっても、あんなようなことは、やらんと決めた。お前が今まで、俺に接してくれたように、獣人の事を、理解してくれる人だつて、もつと増えるって思ってたんだ。それに今だって、新しく、ルジエさんみたいな人に会えて、本当によかったよ。まだ世の中、捨てたもんじゃねえとも思った。彼女が亜人も獣人も関係無い、そう思ってくれたのは、俺の同族の誰かが、甘んじて今の立場を受け入れて、つつましく生きていた結果じゃねえか。な、リステル、俺の言ってること、間違っちゃいねえよな？」

その彼の言葉に、私は泣きながら抱き返すしか出来なかった。その時、私の耳に、かすかにだけど、誰かの声がした。

「な・・・なあ、俺たちが助かったのって・・・あの獣人のお陰・・・なのか？」

「ああ、多分・・・。」

「ルジエさん、本当にすみませんでした。」

私とレーベンは、工業都市『ブルーダイヤ』からほど近い、街道の真ん中、家財道具一式をの詰まった大きな荷物を載せた馬車に乗った、ルジエさん夫妻に言った。

あの事件以後、街を出ることになってしまった、ルジエさんだったが、こうなることは、既に予想していたのか、街を出る準備は、物凄い速さで終わったのだった。

そんなルジエさんに、頭を下げ、お詫びを言つと、彼女はケラケラ笑いながら言った。

「なあに、若いもんが、しみつたれたこと言つてんのよ！そんな顔してたら、幸せが逃げるわよ！それに、アンタ達だけのせいじゃないつて、アタシだつて、レーベンが獣人だつて知つた上で、依頼したんだから、同罪よ。それに、ウチの旦那だつて、承知してたしね。もともと、あの閉鎖的な街の雰囲気には、うんざりしてたし、丁度良かったのよ。今度は、もっと自由な街に腰を据えて、亜人だろうが、獣人だろうが、みんなで和気あいあい出来るような、工場を作ればいいだけの話。ねえ、アンタ。」

すると、手綱を握つた主人が『ああ。』と言つたのが聞こえた。

「それに、悲觀的な話じゃないのよ。亜人は、手先が起用だし、獣人は力仕事に向いてるし、あの工場は人間だけだったから、色々と不便だね。洗剤作りのノウハウと、経営術は、みんなアタシの脳味噌に詰まつてるから、どこに行つたつて変わりやしないのよ。」

そう言つて笑つた、その笑顔を見て思う。なんて元気なオバサンなんだろ、この人なら、どこに行つても色んなことを簡単に乗り越えちゃうんだろうな。

「それじゃあ私達はこれで。」

このまま一緒に居たら、色々、決意が鈍つてしまいそうなので、思い切つて、彼女とは、別の方向に進むことにした。

そして、背を向けて歩き出す私を、ルジエさんが呼び止めた。

「ちょいとお待ちな。」

「何ですか？」

「報酬、まだ渡してなかったね。」

「え・・・？だって、鐘ごとあの、『グレン』『フィデック』とかいう男に取られちゃったじゃないですか。報酬を貰う権利なんて・・・。」

「馬鹿言つのはおよしよ、リステルちゃんと、レーベンは、アタシ達のために、もっと大きい仕事をしてくれたじゃないの。」

「えっ・・・？」

驚く私に、ルジェさんが『・・・たく、鈍い子だねえ。』と、言いながら、顔を近づけ、私の頭を撫でながら

「この牢獄みたいな街から出る決心をさせてくれたっていう、大きな仕事だよ。」

そう言うと、ニコッと笑った。あ、良く見ると、このオバサン、前歯が欠けてるんだ。

その、容姿も、性格も、行動も、まんまオバチャンという彼女に、何か懐かしいものを感じていた。不意に、私の脳裏に、すっかり薄くなってしまった日本・・・いや、地元の風景が流れ、気が付くと、涙がとめどなく流れ、頬を伝って、落ちていた。

そんな私に

「何だい、いきなり泣き出すなんて、変な子だよ。とりあえず、洗剤、石鹼、一年やそこらで使い切れないくらいあるから、持つてきな。どうせ、その変換師の鞆、いくらでも物が入るんだろ？」

そう言いつつ、涙を拭っていて、無防備な私の鞆を、勝手に取ると、色々と物を詰め始めた。そしてレーベンを見ると

「それと、干肉と、堅パンしかないけど、なんぼか入れておくからね、お腹空いたら食べるんだよ。ま、保存もきくし、一週間くらいは持つくらいいいれとくからね。」

その後、私の目の前で、あれやこれやと、どんどん関係ない物を、人の鞆にめいいっぱい詰め込んだルジェさんは、満足そうな笑顔で、鞆を私に返してよこした。そして

「ま、二人共これから仲良くすんだよ！アンタ達みてたら、何かやれる気がするのよね、それじゃあ、日が暮れる前に、どこかの街に着いておきたいから、アタシ達はこれで、風邪だけはひかないように気をつけるんだよ！」

最後にそう言うと、荷台を揺らしながら、馬車は去っていった。それが、どんどん小さくなり、視界のかなたから消えた時、レーベンに言った。

「それじゃあ、行こっか。」

「そうだな。」

温かい風が吹き抜ける中、私達も次の街へと、歩みを勧めた。

つづく

【第15話・冷静になってみようか】（後書き）

それでは、恒例となりました、今回のお酒の紹介。

『グレンファイディック』

高級感漂うケースに入ってます。

実際、店に入ってくる時も、ケースは付いてくるんですね。

シングルモルトと呼ばれ、世界で最も売れている・・・らしいです。

味については

『ややフルーツさをともない、ライトでスムーズな味わい』

なのだそうですが、ウイスキー系を全く飲めないワタクシにとっては、何のこっちゃ？そんな感じですね。

それではまた、作者でした。

## 【第16話・焼いてみようか】

「いらつしゃい！関西風お好み焼き、焼きたてですよー！」

「なあ、リステル、今更だけど、何でこんなことやってんだろ？」

いつものフードではなく、ハツピを身に纏ったレーベンが、お好み焼きを引っくり返しながら言った。

「しょうがないじゃん、『B級グルメ大会』なんだから。はいはい、口動かす前に、手を動かすっ！コゲちゃうじゃないの。」

「へーいへい。親方あ。」

時を遡ること、三日前、私はとある街に着いた。

そこは、『大会都市・コウハク』、お祭り好きの気質らしく、なんだかんだで、『大会』というものが、開かれているのだ。

丁度、私が立ち寄った時に、催されていたのが、この、『B級グルメ大会』の受け付け終了が、翌日に控えていた日だった。

勿論、日本に還る、その目的のため、次元の扉的なものが無いか、探しに来ただけ、優勝賞金を見て、驚いた。その額が

『1・000・000マツカラン』

日本円にして、いくらかは想像もつかないけど、かなりの額であ

る。

大会出場者は、それぞれ、露店を出して、その、売上を競う。しかも、『大会都市』と、銘打っているだけあって、出場費は、タダ、露店も、街が、用意してくれるということなので、かかるのは、材料費のみ。

まあ、入賞しないと、売上の半分は、賞金として、持っていかれてしまうのだけど・・・私には、勝算があった。

私は、この世界からみると、異次元の人間だということ。

ここに来るまでの間、様々な物を食べた。

どうやら、この世界の食事は、『素材の味を生かす』、まあ、良く言えば、贅沢、悪く言えば、『焼いただけ』・『煮ただけ』・『突っ込んだだけ』。

王族とか、貴族は、どんな食べ物を食べているかなんて、今の私には、知る由も無いけど、今回の目的は、あくまで、『B級グルメ』

学生の際に、学校帰りに、食べていた感覚でメニューを決めればいいのだ。

食材については、日本と、大して変わらない。

小麦粉はある、キャベツもある、卵もある、そして、豚肉もある。

この勝負、高い確率で勝つる。

「フフ・・・フフフフ・・・」

思わず、笑をこぼす私に。

「今日のリステル、何か怖いんだけど・・・。」

顔を引つらせたレーベンが、ボソッと言った。

「じゃあ、試作品、作ってみるわね、この世界の味付けは、知らないから、レーベン、アンタの舌を信じることにするわ。」

「ああ、旨いものなら、大歓迎だ。早いとこ頼む。」

と、ワクワクしながら待つ、レーベンの前で、まずはキャベツを千切りに・・・千切り、千切りつて、なかなか難しいわね。

「リステル、キャベツの爆破死体みたいのが出来上がっているんだが、これでいいのか？」

「爆破死体とは失礼ね、そこまで言うなら、アンタがやってみなさいよ。」

「本当は、どうやって切るんだ？」

「そうね・・・。」

と、やり方を説明すると『わかった。』そう言って、包丁を持った。

ま、所詮、ベースが犬のレーベン、爆破死体どころか、キャベツの腐乱死体の出来上がりよね、と、思っていたところ・・・

【カカカカ！カカカカカッ！】

まな板が見事に一定のリズムを刻み、キャベツも刻む、みるみるうちに、綺麗な『千切りキャベツ』の出来上がっていった。

「フウ・・・『千切り』ってヤツを初めてやってみたが、こんな感じでいいのか？」

「・・・いいです。」

とにかく、気を取り直して、具材を刻み、生地の準備、溶いた小麦粉に、具材を混ぜて、熱した鉄板の上に乗せた。

『ジュー・・・』と音を立てる生地、それに、これまたレーベンが薄く切った半分火を通した肉を乗せて・・・と、そこそこ火が通ったところで引っくり返す。

「ヤッ!」 【べちよつ。】

気合十分で臨んだ、お好み焼きのひっくり返しの段階で、失敗し、見るも無残な、お好み焼きの爆破死体の出来上がり・

「・・・。」

「・・・リステル、俺、やろうか？」

「・・・頼みます。」

これまたレーベンに、ちょっとコツを教えただけだったんだけど

「やっ!」

「そうりゃっ！」

「もう一丁っ！」

芸術的に、丸く整えられたお好み焼きが、次々と出来上がっている。

「ん・・・リステル、どうした？そんな隅っこで、しゃがみこんで。腹でも痛いのか？」

乙女としてのプライドを、ズタズタにされ、いたたまれなくなり、部屋の隅っこで体育座りをする私に、不思議そうに声をかけてきた。

「・・・痛いのは腹ではなくて、心です。」

とにかく、意外なことに、レーベンはことごとく器用だった。

確か、この世界の設定では『獣人は力馬鹿』だったはずなのに、開始16話にして、設定の覆されよう。

目の前に、この世界を作っている作者が、うつかり出て来ようものなら、まっすぐ行って右ストレートで、ぶっ飛ばしてやるのに。

そして、お好み焼き作りが、よほど楽しかったのか、一心不乱に焼き続ける横顔を、ぼんやりと見ながら思った。

レーベンって優しいし、器用だし、でも、みてくれがハスキー犬なんだよな。これが、超イケメンの人間だったらなあ、なんて思ってしまう。

その時、不意に、レーベンが、私に声をかけてきた。

「おい、リステル、何ボーっとしてんだ？もう、結構焼きあがったから、そろそろ食べたいんだけど。」

「え？あ、そうね、とりあえず、さつき、具材と一緒に、ソース的な何かを買ってきたから、食べてみましょう。」

「そうだな、ってゆうかお前、ちよつと顔が赤いぞ？どうした？」

「・・・何でもないです。」

『これから、B級グルメ大会を開催します！』

会場に響く、大会開始のアナウンス、ここからバトルのスタートだ。

この日のために、心配顔のレーベンをよそに、持ちうる資材を投げうって、食材を調達し、今日に臨んだ。

全財産を、この日のために、つぎ込んだ。少し、不安はあったものの、大丈夫、日本人が、太古の昔から鍛えてきた味覚と、食へのあくなき欲求が、こんな異世界人に、負けるはずなどない。

でも、こんなことなら、もっとちゃんと、お母さんの手伝いをしておくんだったな。

そばや、うどんの一つも打てれば、もっとコストを抑えられたはずなんだよな。

私の横で、今日の料理長のレーベンが、必死にお好み焼きを、焼き続ける姿を見ながら思った。

するとその時。

「何か、見慣れない食べ物だねえ。どれ、一つ貰おうか。」

モグラみたいな姿の獣人が、私に声をかけてきた。  
そう、全国各地から、この大会と、高額の賞金目当てで、色んな人種がやってくる。

この街には、亜人や、獣人の姿も結構目立っていた。

「はい、まいどありい」

プラスチックのパックは無いので、その代わりの紙に包んで渡した。

受け取ると、それをすぐさま食べる、モグラの獣人、すると・・・。

「うっ！うまいっ！何だ！？この口に入れた途端、肉と、野菜の旨みが凝縮された、とろけるようなこの食感。コクがあるが、しつこくない、噛めば噛むほど、味が増してくる！そして、この春風のような清々しさ！これは・・・食の大革命、やっ！そして、ピリリと辛い、紅しょうがも、少し重たくなった口の中に、新風を巻き起こす！す・・・素晴らしいっ！」

言い回しが少し、青年誌で見たことのある、実の父と仲が悪い、新聞社に勤める食通の人っぽかったのが、気になったけど。まあ、いたく感動しているっばいから、いっか。

その後も、売れ行きは上々。しかし・・・

「リステル、現在8位だつてよ、売上。」

休憩がてら、大会本部まで、様子を見に行っていたレーベンが戻ってきて私に言った。

「ええっ！？マジ？」

「マジもマジも、大マジ、ちょっと視察がてら、他の露店を見てみたんだがな、値段設定が低すぎるのが、原因かしらんど。他のところから比べると、半分以下。」

こんなところで、つまづくとは。レーベンの出来栄えに、有頂天になっていて、他のテントを視察してなかったのが、敗因か。

「困ったな、5位までには入らないと売上が半分、ボツシユートされちゃうよ。レーベン、どうしよう……。」

「うーむ……しょうがない、一個の量を倍にして、値段をちょっと上げるか。今更感があるが、やってみる価値はある。」

「そうね……、それしかないのかぁ……。」

「ま、最後まで諦めるわけにはいかんしな、『やるだけのことはやってみろ、それでダメなら諦める』。そう爺さんが言ってたしな、珍しさもあつて、評価は上々なんだ、どうせなら、入賞して、今後の路銀に困らんようにしたいしな。」

「わかった、私も呼び込みの方で頑張る。声が枯れて、喉が潰れるまでっ!」

お互い、気合を入れ直し、テントに戻ったその時。

【ずどーん!】

私のテントのすぐ近くで、何かが爆発する音が聞こえた。  
そして、逃げ惑う人の声や、大声で怒鳴る男の人の声が周囲に響いた、その時。

『運営本部です！ただいま、獣人の二人組が暴れています！皆さん、大会は一時中断します！現在、護衛団の方に、連絡していますので、売上金を持って、避難してください！』

広場に、大会本部からの、アナウンスが響いた。

「・・・つたく、このギリギリの状態で問題起こすなよ。つたく、空気の読めねえヤツも居るもんだ。」

レーベンが空を見上げて、唇を噛んだ。

「私、ちょっと様子を見てくる！」

私が、そう言って、テントを飛び出すと

「待て、リステル！俺も行くっ！」

レーベンも後ろから着いてきた。そして、テントから出てすぐのことだった。

「あつ！お前は、この間の変な喋り方をする電波っ子！」

聞き覚えのある声がした。その方を見た時、二人組の獣人が、目に映った。

『ホワイト&マツカイ』！

どうしてこんなところに・・・？

つづく。

【第16話・焼いてみようか】（後書き）

・ここから後書き的なものです・

前回、ちよつとシリアス調になってしまったので、力業で、いつものコメディに軌道修正しました。

今回は、『お好み焼きを作るよ』そんな回になってしまいましたね。

そして、このお話を書くにあたって、お好み焼きのことを調べてみたんですが、ちよつとびっくり。

広島風って、麺が入ってるんですね。

初めて知りました。

ワタクシが、大学生の頃、後輩が『広島風です』って作ってくれたんですが、それには

麺が入ってませんでした。

ま、作ってくれたのが、山形出身の子だったんで、しょうがないのかもしれない。

当初、広島風で書いていたので、大幅に軌道修正することと相成りました。いやーあぶない、あぶない。

そんなわけで、たまにはお好み焼きもいいかな、と思ってしまいました。そして

今回のお酒の紹介。

『マツカラン』

今回、お金の単位に使ったお酒です

スパイサイドのウイスキーです。

以前から、ワタクシが後書きで、書いておりますがウイスキー系は飲めないのも、味はわかりません。

ですが、個人的な感想を言わせてもらおうとするならば。

よくまあ、売れるもんだ。

このお酒を触らない日は無いと言っても、過言ではありません。

ウチの店に置いてあるだけでも、6種類程。

4000円代の物が、売れております。

しかし、これ一本で、ワタクシの好きな金麦が何本買えるん・・・  
イヤイヤイヤ、そんな下世話な事を考えてはいけませんね。

それではまた、作者でした。

## 【第17話・驚いてみようか】

「この間のお礼をしてやるぜ！ヒヤッハー！」

「今度は、有り金全部、いただくぜ！ヒヤッハー！」

私の目の前で、テンションだだ上がりの悪党二人組、ホワイト＆マツカイ

見た目は、二足歩行の『ブル・テリア』と『雑種犬』。あまり怖いという感じはしないのだけど、それでも立派な悪党。

現に、彼らの後ろに見える露店が、無残に破壊されていた。

「・・・つたく、この間、私が指摘してあげたにも関わらず、8話経ってもまだ三流悪党のままじゃないの、悪党なら悪党らしく、どこかの王女の心を盗んだり、トランプが発射できる銃を片手に、警察を翻弄したりしなさいよね！」

「は？何言つてやがるこの女、言っている事の意味が、さっぱりわからないのだが。」

ブル・テリア似の獣人が言った。それに続き雑種犬の獣人の方が

「やっぱこの女怖いよ兄い、電波さんだよ。」

そう言いつつ、兄いと呼んだ、犬の影に隠れた。

「ビクつくんじゃないやねえ！言っていることは、アレだが、ただの樹木の変換師、ロクな攻撃も出来ねえ！さっさとお礼参りで行くぞ！」

ブル・テリアが、そう雑種犬に言うと、『うおーっ!』と、言いながら、襲いかかってきた。

徐々に、私に迫り来る二人、思わず身構えるも、この状態では、勝てるハズはない。

躊躇している間に、ブル・テリア、ホワイトの手が、私の目の前まで迫ってきた。

（やられるっ!）

思わず目をつぶった、その時。

「ちょい待ちっ!」

レーベンの声がした、恐る恐る目を開けると、彼が、ホワイトの後ろ襟を掴んで、持ち上げていた。一方、雑種犬のマツカイは、兄貴分が宙に浮いた姿を、口を半開きのまま、見上げている

「なっ・・・何すんだ!？」

「『何すんだ!？』ってのは、こっちのセリフだぜ。ってゆうかよ、ちったあ空気読めってんだ。」

そう言うと、レーベンが、ホワイトを乱暴に地面に降ろす、そして、へたりこんだままの、彼に詰め寄りながら

「あのかな?今、この会場で、何やってるかわかるか?」

「B級・・・グルメ大会です。」

「わかってんじゃねえか。俺達はな、今、賞金が出る3位に入るかどうかの瀬戸際なんだ、こいつを逃したら、売上の半分は、運営に献上しなきゃならん、どういうことかわかるな？そっちの黒いの！」

今度は、レーベンが雑種犬の方を見る、すると

「今までの苦勞が水の泡ってことでやすか？」

「そつ、正解。そんじゃ、話を変えるわ、今度は、二人に問題だ。今、お前らのせいで、折角の客が、いなくなってしまう。この落とし前はどうつけてくれますか？」

言い方は丁寧だが、レーベンは、明らかに脅しにかかっていた。彼が饒舌なのか、そういった雰囲気を出すのが上手いのか、知らぬ間に、状況をひっくり返された悪党獣人二人組は、おどおどしながら

「え・・・そう言われても・・・なあ？」

「皿洗いとか・・・ですかね？兄い。」

お互いの顔を見つめ合っていた。すると

「リステル、お客さんだつてよ。」

レーベンが私にそう言うと、草の束を投げてよこした。そして、こつちを見たまま、イタズラな笑を浮かべつつ、軽くウインクをした。

その時、何となくだけど、彼が私に、言いたいことがわかり

「おっけ、サブスタンスチェンジ！」

握った草が鈍く光り、形を変え、二本のロープが私の掌から伸びた。

そう、以前、『ペリエ』と呼ばれる鰹を捕まえる時に作ったことのある、農夫のおじさんから教えてもらった、ちよつとやそつとでは切れない、草のロープ。

それが、みるみるうちに、ホワイトと、マツカイを縛り上げた。

「うおっ！何すんだ！」

「ばばば暴力・・・反対い！」

後ろ手に縛られたまま、情けない声を上げる、悪党二人組

「何も、殴ったり蹴ったりするつもりなんてないわよ、さっきレイベンが言ったじゃないの、『リステル、お客さんだってよ』ってささ、お二人様ご案内いゝレーベン！じゃんじゃん焼いちゃって！」

「あいよ、店長。」

そのまま二人を、運営から借りてあった、椅子に座らせて、前掛けをしてあげた。

「な・・・何するつもりだ！？」

訳がわからないまま、座らされたホワイトが、声を上げた。

「何って？」

そんな彼に、ズイッと顔を近づけて私は言った

「アンタ達が追い払った、お客の代わりをしてもらっただけよ。あ、そっだ、手だけは自由じゃないと、食べられないから、そこだけは縄解いてあげるわ。でもね、逃げようとか、思わないことね。アンタ達の胴回りにくくりつけてある草の縄、特殊な呪いがかけてあつてね。私が解く前に、無理にちぎったりすると、一生解けなくなるから。」

「な・・・何の呪いでやすか？」

今度は、雑種犬の方が、不安の色を隠せない表情をしながら、訊いてきた。

「何って？寝たときに見る夢が、必ず悪夢になるっていう呪いよ。『樹木使い』を舐めないでよね。」

じとつとした目で、どんよりと言つと。マツカイが、泣きそうな目でホワイトを見ながら言った。

「兄い、やつぱり電波さんと、関わり合いにならない方が良かったんじゃない・・・」

「クソっ！夢をタテに取るとはな、やることが、えげつねえ・・・じゃあねえ！煮るなり焼くなり好きにしまっ！」

さすがに兄貴分だけあつて、最後まで威勢良く『ガンッ！』とテーブルを叩いた。

「何言つてんだ、俺がするのは焼くだけだ。ちゃんと残さず食っ

てけよ。」

ホワイトの声に、少し離れた焼き台で、レーベンがもう、お好み焼きを作っていた。そして

「リステル、とりあえず10人前、上がったぞ！まだまだ焼くから、俺は手を離せねえ！お前、運んでくれ！」

彼が私を呼んだ。そして私が彼の側まで行ったその時、そつと耳元で

「……リステル、呪いとか、ハツタリかまして良かったのか？」

「大丈夫よ、アイツら腕っ節はアレだけど、オツムの方はかなり弱いから、このくらいやつてもバレないわよ。」

「そうか、ま、俺は材料を使い切るまで焼くだけさ、後は頼んだぞ。」

「まっかせといて！」

と、焼きたてのお好み焼きを彼らの前へ、積み上げた。

「な……何だよ、これは。」

「これは私の世界の食べ物、『お好み焼き』って言うの、散っていった客の分、ちゃんと食べてくのよ。」

「……はあい。」

「・・・マツカイ・・・お前・・・何枚食べた？俺、20枚。」

「・・・兄い、俺は22枚・・・もう・・・ムリ・・・。」

自分でも、うんざりするほど積み上げたお好み焼きを全部食べ、テーブルにつつ伏す悪党二人組。そんな彼らに聞いた。

「はいはい、良く食べたわねー、どうだった？お味の方は？」

するとホワイトが

「旨・・・かった。最初の方は。」

続いてマツカイも

「あつしも・・・です、でも、粉物って、後から来るんでやすね。」

二人共、顔を上げずに言った。

「それじゃあ、食べた分は、ちゃんと払って貰わないとね。はいこれ、請求書。ちょっとオマケしておいたわ。毎度ありい」

と、請求書を差し出すと、未だ顔をあげようとしないうちに、チラリと見たホワイトが、『ガタッ！』と縛られていたのもあり、腰に椅子をくつつけたまま立ち上がると

「こつ・・・ちよつ！高くねえか！うえっぷ！」

「何言つてんの、適正価格よ、好み焼き42枚分。あ、ちなみに、運営にツケもきくみたいだから、店の評価としては、売上半分の計算になるけどね。」

「・・・そんなあ。」

と、その時、遠くから声がした。

「おたずね者の『ホワイト&マッカイ』！窃盗に恐喝、暴行、お呼び職務執行妨害の罪で逮捕する！神妙にしろ！」

今頃になつて、運営の呼んだ護衛団がやってきたようだ。

満腹で動けない彼らは、ロクに抵抗も出来ないまま、そのまましよっぴかれて行つたのだった。

その後、結果発表があり、私達の店は、最後の追い上げが、功を奏し、総合3位に食い込んだ。

流石に100万マッカンとはいかなかったものの、お尋ね者を捕らえた謝礼と併せて、一夜にして私達は、結構なお金持ちになつたのだった。

「ねえ、さっきのと、どっちがいい？レーベン、レーベンったらあ。」

私は、街の洋服屋で、真っ赤なパーティドレスを試着して、カーテンを開くと、試着室前で待っていた、スーツ姿のレーベンに見せ

た。すると

「どっちでもいいって。俺には良くわからん。ってゆうか、もうコレ脱いでいいか？」

さすがにスーツは着慣れないのか、はたまた着たことが無いのか、さつきから落ち着かないレーベン

「もー、レーベンは乙女心がわかってないー、こういう時はね、『どっちでもいい』ってのは禁句なのよ。どうして女心がわかんないかなあ！」

「そんなこと言われてもなあ・・・。」

そう、これから私たちは、浮いたお金で、ちよつと贅沢をしてみようと、騒動から数日経った後、立ち寄ったとある街で、王族も通うという、レストランを見つけ、そこに行くことにしたのだ。

いつもの、薄汚れた格好では、バツが悪いということで、ドレスと、スーツを新調し、これから出かけるための準備をしていた。

・王族のレストラン【クール・ド・リオン】・

一歩中に入ると、そこは格調の高い調度品や、石像が壁に綺麗に配置されていた。

私達の着いた席は、テーブルの脚、一本一本、綺麗に磨きあげられ、清潔感のある、敷布、テーブルの中央には、キャンドルが、静かに温かい光をたたえていた。

「しっかしまあ・・・ファンタジーって『中世ヨーロッパ』が好きよねえ。」

以前、本か何かで読んだまんまの店の造りに、思わず呟くと

「ん・・・？リステル、何か言ったか？」

「え？いえ、何でも。」

そんなこんなで、前菜やら、スープやら、出された料理を堪能していた。感想としては、さすがは王族、と、言ったところだろうか。

一方のレーベンは、終始、落ち着かない様子だった。そんな彼にだけ聞こえるように、小声で

「大丈夫だって、アンタが獣人でも、お金さえ払えばお客様。ソワソワしてると格好悪いわよ。」

「いや、そうじゃねえんだ、この、『スーツ』てのが何とも・・・」

「ま、アンタずっと、ゆったりのめフードだったしね、あ、ちょっと席外すから、待っててね。」

「ああ、早く戻ってきてくれよ、一人じゃ何とも落ち着かんからな。」

「わかってるわよ。」

と、久々にしたのもあって、メイクがちょっと崩れてきたので、化粧室に立つ私の耳に

「ご来場の皆様、今日は一風変わったメインディッシュを堪能していただきたく存じます。この間、シェフが面白いものを見つけて・  
・・」

最後まで聞こえなかったけど、男の人が、興奮しながら大きな声で喋っているのが聞こえた。

そろそろメインディッシュが、早いところ戻らないとな。

「良かった！間に合った。メインディッシュはまだみたいね。」

化粧を直し、席に戻ると、座ったまま硬直したレーベンに言った

「ああ、でも、もうそろそろみたいだぞ。」

「そういえば、今日のメインって、何か特別なものみたいね」

「そうだな、確か『オクオノ・ミツヤーツキ』って名前らしいぞ。」

ん？何だろう。既に、嫌な予感しかないのは私だけだろうか。

その時、厨房のドアが開き、何人ものボーイさんが、ソロソロと、銀色のプレートを持って出てきて、各々のテーブルへとついた。

「さあ！今回の新メニュー！この間、シェフが『グルメ大会』に行ったとき、目新しさと、味に感動し、それを忠実に再現した『オクオノ・ミツヤーツキ』を堪能ください！それでは、どうぞ！」

その声に、ボーイさんが、被せていた蓋を取り、私の前に出した

その料理は、案の定・・・

お好み焼き。

どうしてこうなった・・・？

つづく

【第17話・驚いてみようか】（後書き）

・ここから後書き的なものです・

お好み焼き回、今回で終了です。いかがでしたでしょうか？  
半ば、強引な感じになってしまいました。が、後悔はしていない。

そして

ちよつとだけ、宣伝。

同時進行で、もう一本、小説をうpしています。

ちよつと長めですが、よろしければ、そちらも目を通してみてくださいね。

よろしく願います。

最後に・・・

今回のお酒の紹介

【クールドリオン】

リンゴのブランデーです。

値段も、お手頃・・・とはいきませんが、ちよつとした贅沢をしたい時くらいには、気軽に買える値段です。

ワタクシも、これに関してだけは、飲んでみたいな、なんて思っています。

そういえば、コレではないのですが、リンゴがそのまま丸ごと入ったブランデーもあるんです。味よりも

どうやって入れたかが、気になってしょうがありません。

それではまた、作者でした。

## 【第18話・飛び込んでみようか】

「レーベンの嘔吐きiiiiiiiiっ！」

【ガコオ！】

「うわわわわわ！俺だって、ここまでとは思ってなかったんだ！」

【ズドオ！】

ギルドの依頼で訪れた、屋敷のある部屋の一室、私たちは、宙を舞う、椅子やテーブルの猛攻を、タンスの陰に隠れつつ、防いでいた。

こんなことなら、ギルドの依頼掲示板の隣にあった依頼『芝生の再生です。』にしておけば良かったんだ。

確かに、その依頼の報酬は安かった。

前回の件で、多額の賞金を手に入れた私達、最初は良かった。街から街への移動は馬車を使い、宿は、ちゃんと風呂がある、ちよつとランク上の宿。いいものを食べて、観光気分で日本に還る手段を探していた。

悪銭身につかず。

とはいったもの・・・いや、悪いことをして稼いだわけじゃないから、この例えは変か。とにかく、自らと釣り合わない、多額のお金は手元に残らないとは、良く言ったもので、一カ月も経たない内に、ほぼ、使い切ってしまった。

しょうがないので、ふらりと訪れた変換師のギルドで、久々に、手頃な依頼を探していた時に見つけた、この件。そこには

『観葉植物の位置が、日が変わると、別のところへ移動しています。原因追求のため、樹木の変換師、求む！』

そう、書いてあった。何か、嫌な感じはしたものの、他の属性と比べ、報酬がデフレスパイラル真っ只中の、樹木使いの依頼としては、破格だった。

「・・・レーベン、どうしよう。」

隣に居る、シベリアンハスキーと、人間の合の子、獣人のレーベんに意見を求めた。すると

「ま、大丈夫だろ？樹木ってのは、危険な依頼ってのはほとんど無いっていうし。それに、この報酬の額は破格だな。入ったばかりの依頼だし、他のヤツに取られない内に、さっさと契約しまおうぜ！」

彼は彼で、すごく乗り気だった。

「本当に、大丈夫かなあ・・・。」

何か引つかかる、女の勘が、心の奥底で警鐘を鳴らしていた。すると

「何だよりステル、お前にしては、随分慎重じゃねえか。大丈夫だって、どうせ『ヨナカニウゴキマワリ草』とか、夜行性の草だろ？それなら、他の生き物に危害は加えねえって言うし、一晩で原因

究明。何なら、お前、寝ててもいいぞ。」

不思議と草の生態に詳しいレーベンが、そんなことを言うものだから、それに乗って、依頼を受けたのだった。

「すご・・・いね。」

「すご・・・いな。」

ギルドがくれた、地図を頼りに、依頼主の家を訪れると、大きな屋敷にたどり着いた。

その屋敷は、以前、テレビで見たことのある、ビバリーヒルズのお金持ちが住む、屋敷そのもの。

正面から、数を数えただけでもクラッとくる窓の多さだった。

「あの窓が、全部部屋だったら24LDKはあるわね。」

思わず呟く私に、レーベンが

「『LDK』？何だそりゃ？」

「リビング、ダイニング、キッチンよ、厳密に言うと、24個の部屋に、それぞれ足して、27部屋。日本じゃありえないわ、これだからファンタジーの世界は・・・。」

「リステルって、たまに変なことを口走るよな。」

「放っておいて頂戴。」

そんなこんなで、門をくぐり、一步中に入ると、玄関の外に立っていた執事らしき人が、やってきて

「お待ちしておりました、樹木の変換師、リステルさんと、剣士のレーベンさんですね？旦那様がお待ちです。ささ、どうぞ。」

ドラゴン何とかにありがちな、杓子定規な挨拶をして、屋敷の中に通された私達。

玄関のドアから、一步、中に入ると、目の前には、上へと続く階段、と、そこに敷かれているのは、フカフカな赤い絨毯。じゅうたん

それを見て思う、ファンタジー世界のお金持ちって、個性を無くすんだろっか？

そんな私の思いをよそに、さっきの執事らしきヒゲのオジサンが

「私はこの『ダーク家』に仕える執事、セバスチャンと申します。ささ、旦那様がお待ちです、二階の書斎へどうぞ。」

・・・セバスチャン！？

思わず、全身の力が抜け、その場にへたり込む私に、レーベンが

「いきなり膝から崩れ落ちるなんて、どうしたんだ！？腹でも痛いのか？」

私のことを心配して、顔を覗き込んできた。

「あ、ありがと、でも、私が何かあることに、腹具合を探るのは、やめてくんない？」

「何だ？腹じゃないのか、じゃあ、腰か？」

「腰でもないから。」

冷たく言い放つ私に、不思議そうな顔をするレーベン、しかしまあ、どうして執事の名前って、ことごとく『セバスチャン』なんだろうか。

日本に還ったら、まずコレをググってみよう。

何とか立ち上がり、執事、セバスチャンの後に続いて、二階の書斎の前に着いたところで

「さ、旦那様がお待ちです、中へどうぞ。」

そう言いつつ、セバスチャンが、『ギギギイ……』と、重たそうな、ドアを開けた。

そのまま、中に入ると、窓を背にして、大きな机の前に、これまた黒髪の、ナイスミドルというのだろうか、40歳前後の男性が堂々と、座っていた。

その、彼が放つ、何とか、威厳ともとれる、そんな雰囲気、思わず会釈をすると、彼が言った。

「待っていた。ギルドの方から、既に名前は聞いている、『樹木』の変換師、リステル殿に、剣士のレーベン殿ですな。私は、この館の主で『マイヤーズ』『ダーク』という『マイヤーズ』と呼んでくれて結構。」

「あ、よろしく願います。」

「とりあえず、そのソファアに腰掛けてくれないか？話はそれからだ。」

「それじゃあ、失礼して……。」

と、一歩踏み出した時、レーベンが

「お……いや、私も座っていいのか？」

ああ、獣人だということを、気にしているのかな。そう思ったとき、マイヤーズさんが、笑いながら言った。

「構わん、座ってくれないと、ゆっくり話も出来んだろ？ 今、セバスにお茶の用意をさせるから、ちよつと待っていてくれ。と、質問に答えていなかったな、レーベン殿は、剣士だから立っている、そう思われたのかな？」

「あ、いえ、その……。私は獣人です。」

「獣人だから何だっていうのだ、もしかして、獣人は、痔病<sup>ぢ</sup>持ちか何かで、椅子に座れないのかなのか？ それなら穴の空いたクッションをだな……。」

レーベンが、獣人だということを、全く気にしていない様子だった。

それにしても、この世界にも、痔病持ちの人のための『穴空きクッション』が存在することに、ちよつとびっくりしていると

「いえ、大丈夫です。それじゃあ、遠慮なく。」

そう言いつつ、私が座ると同時に、レーベンも、腰を降ろした。

それを見計らったのか、マイヤーズさんが、真剣な目つきで私達を見ると

「早速だが、仕事の話をしよう。依頼の内容は知っていると思うのだが、観葉植物の配置が、毎日変わっていてだな、最初は数センチ動いているくらいだったのだが、日を追うごとに、動きが大きくなっていったな、この間は、ベランダへ続く窓の鍵が開いていて、その外に置いてあったんだ。最初、物取りを疑ったのだが、泥棒が入った形跡も無くてな、困っているのだ。アレは二年前、亡くなった妻が、大事にしていたものでな、うっかり割れで、枯れてしまったりしたら、私が死んだ時に、顔向けも出来ん。草ということもあってな、『樹木』の変換師殿に、何とかしてもらいたいのだ。とにかく、動かないように、何とかして欲しい。」

その話を聞いて思う、この人は、奥さんを本当に愛していたんだな。

「わかりました。とりあえず、原因究明に勤めてみますね。それで、動き出す時間帯とかは、わかりますか？」

私が、マイヤーズさんに言うと

「それが、わからんのだよ、日が沈んでからということとは、間違いないのだが、セバスや、私が徹夜で見ている時には、一向に動かないのだが、監視の目を休めると、次の日には、動いているんだ、不思議なものだ・・・。」

遠い目をしながら、呟くように、言った。

とりあえず、有力な情報は無し・・・と、ま、昼間には動かないみたいだから、勝負は夜中か。

「わかりました、早速、今晚から、私と、レーベンが、見張つてみます。その時、異変があつたら、どうしたらいいですか？」

私がマイヤーズさんに、そう言つと

「すぐに知らせてくれ、私の寢室は、同じフロアにある。鍵は開けておくから、どちらでもいい、すぐに来てくれ。」

「わかりました。」

その後、イチ客人には豪勢すぎるほどの、晩ご飯のもてなしを受けて、とつぷり日が沈んだ頃、私と、レーベンは、問題の部屋に二人、待機することになったのだった。

つづく

## 【第18話・飛び込んでみようか】（後書き）

・ここから後書き的なものです・

今回から、ワタクシ得意（？）の幽霊物です。とはいえ、ほんのさわりの回となりました。

次回から、盛り上がりますよー・・・と、言いたいところですが、ワタクシの文章力でどこまで出来るかわかりませんが、頑張ってみますね。

そして

以前、読者の方から、『、』が多いのでは？という指摘を受けましてね、三回程前から、こっちに転載するにあたって、若干ではありますが、句読点を減らしてみました。

いかがだったでしょう？読みやすくなっているでしょうか？

そして、意見をお寄せいただいた方には、大変感謝しております。基本、一人で書いているので、至らない点がありましたら、お寄せください。

とはいえ、ワタクシ、精神防御力が、事のほか弱いので、やんわりと、そして、ソフトに、お願いします。

最後になりましたが、恒例となりました、お酒の紹介のコーナー

今回は、貴族男性の名前に使った『マイヤーズ・ダーク』

ラム酒です。

これが、飲み物だと知ったのは、つい最近のこと  
それまでは、家にも、小さなボトルがありましたし、ケーキを作

る、調味料だと思ってました。

ワタクシは、直接、お酒として、飲んだことはありませんが、これを愛飲する方には、ラムというお酒は、美味しいですね。

そのうち、堪能してみたいと思っています。

それではまた、次回をお楽しみに！作者でした

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9618x/>

---

ハロワに行ったはずなのに、なりゆきで『変換師』になっちゃった。

2012年1月5日23時49分発行